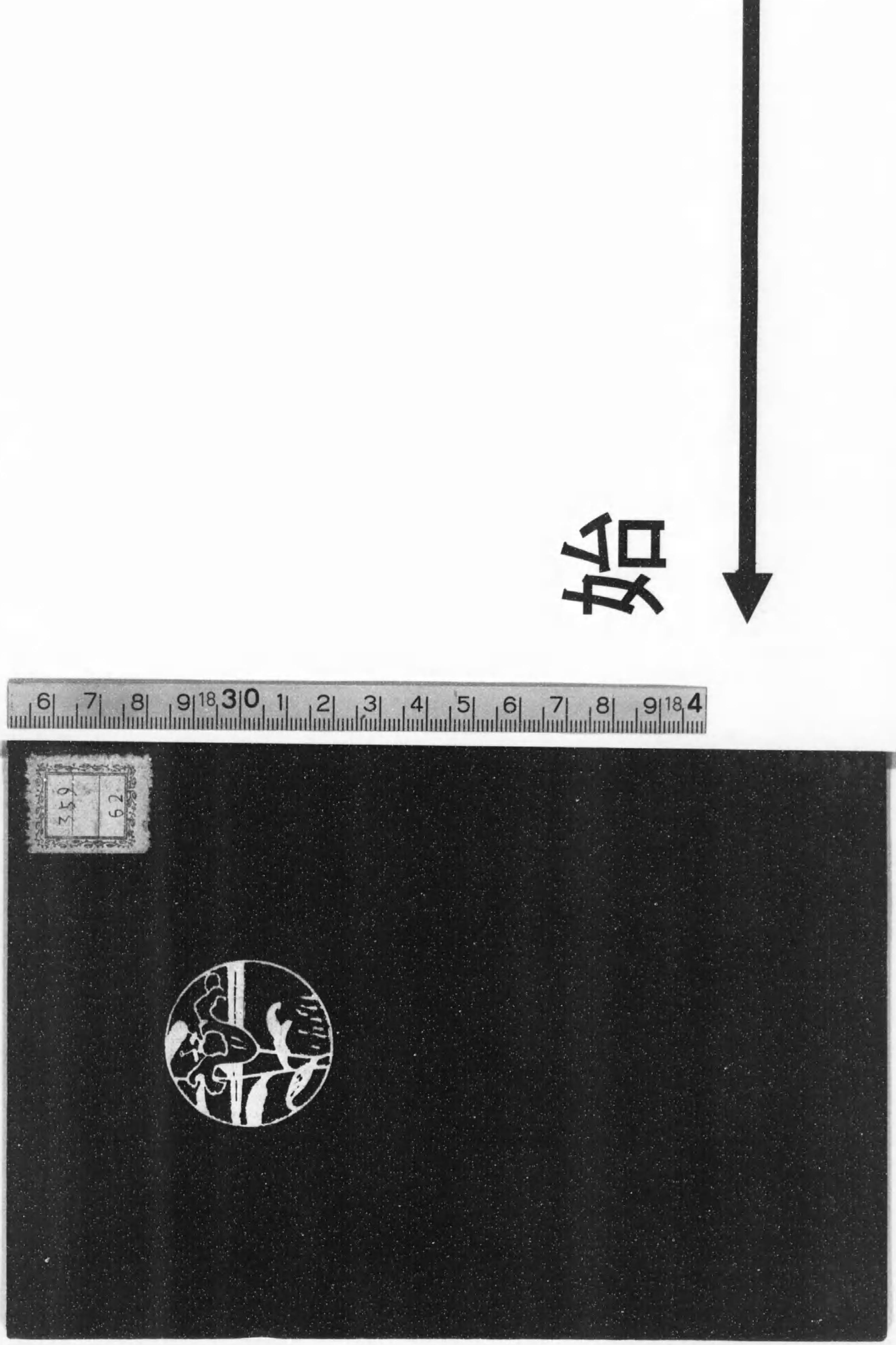
359
62

特219
160

昭和に輝く

原 静村 著

南海新聞社

昭和九.

はしがき

日本人諸君吾等が生きる國家社會は斷崖絶壁を歩んでゐる。將に日本は有史以來未曾有の國難に直面してゐる、誠忠愛國の眞仁人は起よ……

昭和維新の時は今也皇天明示の眞理法に生くの機は熟せり錦旗を奉戴して人心革命を斷行すべき秋也、我國の政治墮落腐敗も社會の混亂窮狀とが容易ならざる事態を招來する恐れあり。然るに之を恢興拾收すべき術も力も無いまでに立ち到つた、この邦家の現狀を座視するに偲びざる狀態にあり、國家に政治理想の本質を失

ひ民衆は凡て自己の立脚すべき大道を失つて、その方途に轉迷しつゝあるに抱らず、而も社會の大衆は擧げて之を覺らず偶々これを憂懼するものありと雖も、大方禍の根源を正視明察するの能を缺除するか或は各自身上の都合に餘儀なくせられて行詰れる邦家民心打開の術を回らすものなく又時にこ息的手段を講ずると雖も多くその徹底を缺き事績の擧らざることは蓋し理の當然である。この國家社會の墮落腐敗暗黑昏迷の情勢を徒らに經過推移せしめて、事態をこの儘に放任せんか、終には國家に恐るべき凶變の將來すること明白である。吾等は之を深憂するが故に奮然起たなけ

ればならぬ、吾等はいくら自己に直接影響が無いからと云つて少しく社會上の出來事に對て敏感にならなけらばならぬお互に自分等自身のことだ。

日本に於ける現今の政治でも宗教でも財政經濟でも乃至文化の程度でも、一切の社會現象を有とあらゆる方面から少しく冷靜に眺めて見れば、そこに大和民族の日本、吾々日本人自身の國家がその現狀から前途將來に就て、深刻に考へて見たならば、決して凝としては居られない筈である。吾等は日本と云ふ大なる國家社會からしだならば誠に泡抹にも等しいものである。さりながら邦家

の危急に對する共同責任を痛切に感じ茲に泣ゐて同胞に訴ふるものである。

されど吾等は自己の爲めに世に求むべき何物もない。たゞ國運民命の歸趨す所と凝つと視詰めて來て最早我慢が出來ぬ。斷崖絶壁の突端に歩を進めつゝ而もそれを覺らざる瞽盲の日本民衆よ。座視して憐れ亡滅の悶へ見るよりは、若かず、大聲叱呼して倒るまで戰はんにはと、こゝに書したはその血叫である、今や我が日本は世界的地位から謂ふならば、將に有色人種の盟主としての大自覺に立脚してやがては世界全人類安寧幸福への曉鐘をつき鳴らさなければならぬ大切な任務を持つてゐるではないか日本人諸君人間が世立つて個人としての成功と失敗、之れも輕視してはならぬ至重な問題である。さりながら自己の生きる國家社會が滅亡的危機に頻して居て、一身一家の富貴顧榮が何になるか、速かにその無明昏黑の暗より醒めて、人の世の最高理想へ共に突進しやうでないか眞實に國を憂へ、大和民族に對して僞りなき慈悲心を有し愛國の爲め血を燃すものは起て、日本をして亡國的危殆に陷るゝものは赤化左傾の世界的思潮にあらず、社會主義にあらず。無政府共産主義にあらず、斯る片々た跛行思想は大國家的正義の

鎧袖一觸のみ。吾等は進んで國家に多年釀生されたる虚僞と無稽の眞相を速かにその色眼鏡をはずして、國家的重症の眞實情を正診凝視せよ日本が惱みつゝある病症は實に中樞神經の痳痺症とは曰く、國の立法府を組織する上下兩院に於ける議員の破廉耻、無能と我利我慾である。

曰く、官吏の無責任にして私利を營み自己の職責を忘却したる祿盜的醜類の愈々多きを加ふること、

曰く、上皇室より特別の恩澤に浴する華族階級が大方は自己の大切なる地位と責任とを忘却し醉生夢生的輩が充滿してゐる。悲し

むべき事實

曰く、實業家又は事業家と稱する徒ら私利私福に汲くとして眼中國家社會なく財界を顧みざること、

曰く、文教の府には一點晃々たる指導の方針なく昏亂錯雜その極に達せる思想の統一も取締も全く無能なること、

曰く、高等學府は公私立共に不統一紊亂せること、

曰く、人に安心立命を說くべき宗教々團は悉く腐敗墮落して最早有害無益の觀がある。

枚擧するさへその繁に堪へないが概ね斯の如き始末である。

内治上らず外交振はず財政乏しく民に生活難ありて、實業興らず上下交々利を貧ぼりて飽くことを知らず眞に餓狼の群と選ふ所はない。

噫々我等の日本をして斯くまで混亂危態に陷らしめた、この病源菌が何れにあつたか之によつて明らかになつたであらう、要するに吾等大和民族の光輝ある日本國家に外部から侵入する幾多の黴菌がある。

内部から發生する各種の毒素がある。これぞ是れ、邦家病弊の原因を作するのである。外來の黴菌恐るべき繁殖力を以て侵蝕し内

に發せる毒素は刻一刻その惡作用を發揮して止まぬ、内外相呼應して、この國を蠢動してゐる。

されど多くの同胞國民は、この國家的大難に一向心づかぬ、何故に心づかないのか、それば恰も痴漢が毒酒に狂醉せるが如く、この恐るべき黴菌と毒素とに侵蝕されて、己に既に暉醉の狀態に陷つてゐるからではないか。

眞實我等と憂を共にする情血の同胞よ……　日本現下の疾患は叙上如く人の風上に起つ人々が口に高言を吐きながら誠に國家觀念なく崇高絶對の大日本國家信念の缺除してゐることである。

而して一方未練の民衆が無自覺、無反省にもあやまれる彼等の甘言誘惑に引掛つた結果に外ならぬのでないか、良藥は口に苦がく忠言耳に遡ふ、されど文王は言はずや『仁人は能く直諫を受けて至情を惡ます』と。吾等は唯だ國を愛し、同胞の前途を杞憂するが爲めに敢て直言するものである。

起てよ而してこの非常時に赴かうではないか、この憂ふべき國家の危急を自ら救濟せんとするには果して如何なる方策を回らすべきか、明治維新の元勳大西鄉翁は偉人であつた、翁は生命もいらず、名もいらず。官位も金もいらぬ人間程始末におへぬものはない。然しかゝる始末におへぬ人間こそ、眞に大きな仕事を爲すものであると喝破された至言でないか、熱血至誠の同胞よ、吾等は此所に提唱する日本國家の非常時に際して。

眞實、生命もいらず、名もいらず官位も金もいらない熱血赤誠の士が山川草澤に蹶起することのみである、我れこそと思はん人士は奮然として起て……　されど心事に一點の混濁があつては駄目だ、それぞ日本に昭和維新の大業を爲すべき卵子である。

烏合の集團ならば百千萬あると雖も蛆蟲の蠢動に終らんのみ、鐘が鳴る。鐘が鳴る。

英雄出でよ、出でて以て非常時國難を吹き飛せと曉鐘はけたゝましく亂打きれてゐる。世を慨し國を憂へて山川沼澤に雌伏せる蛟龍の傑士は一擧にして奮起せよと、余はこの曉鐘に應るべく常に國家社會正義の爲め奮鬪され國民の範るべき諸士を更に深く廣く天下に紹介し後進子弟の訓育の資する處あらんと欲し併せて諸士の功蹟と名譽を不朽に傳ふの料として茲に此の小冊子を著した所以である。

余は文章を修めず、文字を知らず拆角に玉璧を得て瓦石となきかを心窃に耻ずるものである。

卷頭謝辭

凡そ人物月旦ほど難ケ敷しいものはなからう。褒め過ぎても、貶し過ぎても變なものになる、殊に僅かな短時日に書きあげたもの充分に材を蒐め得ず的を脱づれた妄評も多からう事と信ずる、平に御容赦を乞ふ、次第不同も却つて此方が妙味あらんかとも考へた故です。玉石混淆の意味ではありませんゑふ諒察あれ。

昭和九年六月二十三日　原靜村

昭和に輝く（目次）

松浪仁一郎……（一）
寺田甚吉……（六）
寺田吉之助……（一三）
寺田榮吉……（一四）
西本健次郎……（一五）
西竹吉……（一八）
垂井清之助……（一九）
久保惣太郎……（二二）
關二郎……（二五）
岡米吉……（二六）
岡裕利……（二九）

西田佐三郎……（三〇）
山田宗三郎……（三二）
高岡隆心……（三三）
福島嘉六郎……（四一）
今村庄平……（四三）
金井德次郎……（四四）
辻楠松……（四七）
清水庄太郎……（四九）
玉置吉之丞……（五二）
關榮覺……（五四）
前田辰之助……（五七）
田中晉吉……（六〇）
諏訪常吉……（六二）
諏訪幸雄……（六四）
垂井清右衛門……（六七）
德守清鳳……（七〇）
寺田元之助……（七二）
津田榮……（七五）
辻本豊三郎……（七七）
小西熊治郎……（八一）
西村元之助……（八三）
射場正謙……（八四）

大谷友之進……（八五）
廣澤耕作……（八八）
楠本貞一……（九〇）
金納源十郎……（九一）
渡邊行太郎……（九四）
原藤右門……（九七）
岸田良太郎……（九九）
川崎久勝……（一〇〇）
阪田彌兵衛……（一〇三）
山口義一……（一〇五）

東京帝國大學名譽教授 法學博士 松浪仁一郎氏

世界的の學者。海法學の最高峯法學博士、松浪仁一郎氏は明治元年一月一日岸和田市並松町に生まる。

由來泉州人は協力一致團結の思想に乏しく身を他府縣に寄する者は毫も鄉里を顧みず、而して在鄉の士は鄉土出身者の姓名すら之を知らざるもの多く、隨て其間殆んど交渉なく、聯鎖なく、協合なし。去れば又先輩と後進者との間も疎隔甚だしく、之を他府縣に於て見るが如き兩者の間に指導敬從の美風存ぞざるは吾人の常に遺憾とする所である。

殊に岸和田市出身の士に至つては地方を顧みるもの甚だ少なく、甚しきに至つては教育家を以て任じつゝある人にして祖先の展望も閑却して居る人物がある。之等は文部省か祖先崇拜せよとの訓令に反するものではないか。今地方人士の言を聞くに學問すれば土地に居らぬ。親の墓も顧みないやうになるから、學者にはしないと言つて居るものもあると云ふ風である。是れを以て見

るも地方先輩の感化程世に恐ろしきものはなく、一體愛鄉心のないものは愛國心のないものである。教育も此處に至ると亦危險なりと云はねばならぬ。

然るに鄉土の大先輩法學博士松浪先生が身は高位高官日本の最高學府の大先生であり、而も世界的海法學者として全世界に鳴り響く先生は常に愛鄉の爲めに熱血を燃し東京と岸和田を往來し市政の爲めに産業經濟の爲めに將た亦、人物養成の爲めに總ゆる指導啓發をされ鄉黨の爲めに盡瘁せられたること眞に舉ぐるに遑まあらず、實に松浪先生は岸和田市の大恩人たるのみならず又以て當代の師表後世の軌範たり。吾等鄉人愈々その盡孝報恩の大思想と盛德を欽仰して止まないのである。

終りに臨みて先生に一言お願して置きたき一事がある。夫れは他事でない。先生はヨリ多く歸鄉せられ岸和田人士を精神的に指導してもらい度い一事である。

岸和田は依然として低級なる趣味を喜び、依然として公德心なく、公共心なく又依然として風俗人情は輕浮を極め、依然として個人主義の弊を脫却せず、藝妓買ひと空威張りと鍍金細工の俗臭紛々、不謹愼極まる人物が横行し遂に物質文明の積弊の窮極する所に到達するのではなからうか。吾人は此の想像の杞人の憂に終らんことを希望して止まないのである。然し審に現代の岸和田を觀て其の將來を察するに物質文明の大に發達すべき千百の理由を觀るも、未だ精神的文明の將來を樂觀すべき一の兆候を認めないのである。之が救濟策として博士が常に高唱される教育機關の完備に俟つの外はなく、之れに依りて精神文明の必要を悟らしめ、岸和田紳士をして岸和田の現代精神の缺陷を自覺するの素養を得せしめなければならない。

然らば精神文明を高唱し岸和田紳士の精神的向上の大指導者として何人が適當であるか、現在の岸和田を見渡すとこころ殘念乍ら適任者がない。財界人としては天下の富豪勤行力行の權化寺田甚與茂、寺田元吉翁等が世に在はすときは岸和田の大御所として八方に睨みを利かして居たが兩翁亡き今日は全く群雄割據して偉いもの勝ちの狀態である。

此の意味に於て岸和田の御意見番、犬指導者として博士が言はることには市民の何人と雖も毫も異存はない、異存ごころか益々繁く往來して岸和田の蒙を啓いてもらいとは四萬市民熱望して

止まないとこである。

博士の産神岸和田市菅原神社境内に昭和三年三月母公の報恩の爲めに建設された報恩碑の碑文

報恩碑表の碑文

報恩

東郷平八郎書

報恩碑裏の碑文

松浪先生ハ明治元年一月一日並松町ニ生レテ幼キ頃父ヲ失ヒ慈母ニ育テラレマシタ
明治十四年岸和田小學校同十九年京都同志社英學校同二十三年第一高等中學校同二十六
年帝國大學を何レモ首席デ卒業セラレ同年法典調査會補助委員トナラレマシタ明治三十

二年倫敦ニ又三十三年巴里ニ開カレタ萬國海法會義、副議長ニアゲラレ歸朝後東京帝國
大學教授トナラレマシタ明治三十四年法學博士ノ學位ヲ授ケラレ同四十二年商法取調委
員トナリ昭和二年四月勅旨ニ依リ帝國學士院會員ヲ仰付ケラレ今ハ從三位勳二等デ日本
全國教員二十數萬人ノ筆頭デアリマス
本官ノ外日清日露ノ戰役ニハ内閣及ヒ陸海軍省ノ顧問トナラレ手柄ガアリ又十數年間續
ケテ文官高等試驗委員ニナラレマシタ民間ノ職トシテハ現ニ海軍協會及ヒ港灣協會ノ副
會長海防義會監事等ヲツトメテヰラレマス
先生ハ幼少ノ時カラ母ノ教ニ依リ當産土神ヲ信仰セラレ常ニ報恩ノ誠ヲ致サレマシタガ
茲ニ其微意ヲ表ス爲トテ此碑ヲ建テラレタノデアリマス

昭和三年三月

岸和田市尋常小學校第六年生作文竝ニ謹書

帝國學士院會員從三位勳二等法學博士松浪仁一郎建之

南海鐵道株式會社

社長　寺田甚吉氏

西日本の富豪を語るもの、先づ指を必ず寺田家に屈す。而して當主寺田甚吉氏が果して如何なる人物にして如何なる性格を備ふるかは、苟くも寺田家を知らんと欲するものの齊しく聞かんと欲する所にして、試みに之を縱より觀、將た横より、上より、下より觀て、所謂縱横無盡に論評するは極めて興味深かき事なるを信じ、則ち茲に吾人の眼に映じたる、天下の富豪寺田甚吉氏を拉へ來りて、滿天下の人に縱横解剖の刀を下さんとす。現實に一億の富を有し、寺田家の總統領となり、威望二つながら兼ね備へたる、所謂天下の大富豪寺田甚吉氏は果して如何なる人物なるべき乎。一言にして之れを盡せば、彼れは「富豪としてその本分を完全に盡す人なり」先代甚與茂氏は創業の人にして甚吉氏は守成の人である。

寺田氏の性格

氏は大膽にして而かも細心、聰明にして而かも沈毅穎達にして而かも宏量、先見の明、着眼の

鋭、飽く迄大事を遂行するといふ勇氣と苦節を備へ、苟くも一度劃策したることは中途にしてドンナ障碍があつても敢行せねば熄まぬといふ、いと頼もしき活き〳〵した精神をその渾身に漲らしてあるものは甚吉氏である。

亦至つて平和な人である。而して極めて德素を重んずる人である。其の衒はず、誇らず、非義を悅ばず、非禮を行はない所謂氏が篤實、篤行のうちに人を愛するといふ美德かアリ〳〵と現はれてゐる。

氏が人に勝れたる愛國の熱誠も又善事に向つて敢爲邁往の美質は至愛至仁の美德から轉化した處の醇汁に過ぎない。古人は愛を以て衆德の最だといふた。愛は何故に夫れほどに尊いのであるか。愛は不朽的のものである。決して改易的のものでない。之れと同時に愛は絶對的のものである、更に不變的のものである。天地が壞はれ人類が滅びても愛は決して壞はれない滅ばない。ソノ如く至愛至仁の人は不朽の人である。

不變の人である。又平和を好む人は愛の至情の溢れた人である。如此の人はドンナ場合にも餘裕

がある。恒に心が平かである卽ち死に臨んでも樂に居ても苦に處しても仕事の時も遊ぶ折も食事の際も若くは父朋と語り人と談ずる間にもコセ付かないで應揚な何となく靜かにユッタリとした處がある。而してかゝる人こそ果して其容貌にまで寛厚の同情と平和の波とを湛へてゐる。而かも寺田氏は確かに其のタイプの一人ではないか、然り寺田氏の容貌は恒に平和の波を漲らしてゐる。甚だしく自得したる人間として滿面悉く之れ平和の神が旅宿、宮殿のやうである。福澤桃介氏嘗て氏を評して曰く『寺田氏は人物も大なれば隨て其の器も大である氏が胸中恒に無限の平和を湛て紆徐迫らず綽然として餘裕のある處なぞは大阪に於ける青年實業家第一等の人物である。而かも氏が平和の源より湧沸する無限の愛嬌は亦鬱然掬すべき風趣がある。之は決して他に匹儔見ない氏の天品である。』然り福澤氏のいふが如く氏の平和と盛德は氏の天品である。卽ち天品なるが故に自然である。

氏は決して平和を衒ひ有德を虛飾するの人でない氏は此點に於て確かに萬人超卓せるものである

抑も日本の富豪と歐米の富豪と對照したならば全く正反對でとても比較にならぬ歐米の大戰に

際しても英國あたりの貴族富豪が政府に金を提供し、國家の大事を各自の双肩に負擔する意氣を示して居たことは、とても日本人の想像にも及ばぬ所である。彼等の多くは其の政府が課稅の少ないことを心配し何故に更に多く取づて國家の爲めに費さないかと言つたことがある。之れを往年の日露戰役に際して政府が公債を勸誘しても中々容易に應募を諾しなかつた日本の富豪に比較すると如何に是れを恥づべき者ならざるかを知ることが出來る。

最近に於ても昭和六年滿州事變に際しても亦然りである。暴戾な支那人に我等の表徵日の丸の國旗が蹂躙されても彼等資本特權階級は血を燃やさない。零下四十度の朔風漂々として面を刮り冷寒凛々として指を墜す北滿の曠野に皇軍の權益を護る爲めに戰を續ける我が勇士の慰問の聲は全國津々浦々熱火の如く燃え上り、可憐なる一小學校兒童も起つて皇國萬歲を叫び、大和撫子らも血書を認めて看護婦を志願し又宿場女郎に到る迄、貧者の一錢を眞心と共に眞に擧國一致忠烈正義の士を慰問したが彼等貴族富豪階級は知らぬ、存ぜぬ振りをしてビタ一厘も慰問しなかつたことは實に非國民、非人道的に良心を自殺されて居たのである。

彼等今にして覺醒せなければ全く取りかやしのつかぬ破目に陷りはしないか世界の歴史の中に革命的の事情の多くは貴族富豪と政權の壓迫に反抗して其槍玉に上げられたものは横暴なる富豪と貴族であつたことを彼等は考へなくてはならぬ。

日本の富豪は富の乞食、富の囚奴、富の非道者を以て甘んずる傾きがある。即ち彼等の懷中は恒に豊かに其の倉庫は財貨を以て盈されつゝあるも彼等の心には平和が宿つてゐない、至樂の何物たるかを解せない。ゲーテなどもいつた事がある『富の何物たるを解せずんば以て富者たるを能はず』寺田氏は此の亞流の富豪と大に撰を異にしてゐる。氏は慈善と公共と國家の爲めには喜んで金錢を損つるの義心もある。而かも此の義心は絶えず氏の肺腑を燃しつゝある。氏の理想は富豪として其本分を出來得る限り竭したいといふにある。之れを詳言せば富の後世に遺すべき土産として其の富を及ぶ限り善用するにあるのだ。更に之れを換言せば後世に傳へて以て燦然飾るに足るべき一大土産を遺物としたいといふにある。富の善用的最後の目的は宛がらクロムウエルの世後に英國を遺しワシントンの米國を遺したと同一である。氏など慥かに此の理想の一人では

あるまいか。

寺田氏の其性格は卒直にして剛毅、人に對して城府を設けず又能く部下を愛す。氏が會社に出勤するや如何なる微賤の業に從ふ一勞働者に至るまで會へば必ず慇懃禮を返す、曾て吾人は或時戯れ『是れ君か人望日に隆き所以也』と言へば氏が笑つて曰く『何にも吾輩が彼等に向つてお世辭をいふ必要はないが、さうかといふてお世辭する位いで人心を收獲することが出來るものではない。吾輩は唯だ人間として禮を返すに過ぎない。彼も我も同じ人間である以上互に相當の禮儀あるべき筈である』然り氏が如何なる場合にも『人間本位』若し黄金萬能主義の日本の富豪が亡びたる時は正に寺田甚吉氏が大平を謳歌する時であらう。吾人は氏の人格を推量す、氏は飽く迄大にして慈眼仁腸である氏の益々富まんことは獨り吾人の祈る所ばかりでなく恐らくは一般貧者と雖へども又之れを祈るものである。貧者をして益々富まんことを祈らしめよとは之れ天來の聲である苟くも氏をして此の聲を發せしむ。之れ富者として其の義務を果たし本分を竭すに於て遺憾なきを致すからではないか。寺田氏に付いて猶詳しく論ずべき點もあらうが氏の眞面目は如上

の評の中に委されて居るだらうと信ずるから此位に筆を擱くとして最後に附言したきことは氏の高遠なる理想偉大な抱負、その義心を今日直ちに實現さすことは愼重なる氏のことであるから不可能であるかも知れないが他日必ずあることを吾人は信じて止まず。

和泉銀行

取頭寺田吉之助氏

勤儉力行一代に巨富を成したる故寺田甚與茂氏に吾人は心から敬服するものは其の富にあらずして實に優生兒を育み上げて置かれたことに敬服するものである。

世の富豪の家に生れ其の恩澤に浴するものを見るに、放肆に流れ豪奢を事とし、父祖の膏血に成れる家産を蕩盡するか、然らざれば鄙吝墮劣。徒らに其遺産を死守して利用厚生の道を知らず或は遺産を中心に兄弟が血で血を洗ふの愚を敢てし以て世の嘲笑を招くに過ぎざるものが甚だ多いやうである。

けれども寺田家の三兄弟は人格、手腕、識見力量に到るまで寸分の隙きのない全く文字通りに酷似して居る。而して其の親密全く一身同體である。

この青年紳士の典型的たる三優生兒を遺されたこれが故人が如何に偉大なる人格者であつたかと言ふことを最も雄辯に物語るものである。

寺田吉之助氏は泉州第一の信用を有する和泉銀行の頭取である。由來銀行業の基礎は信用にあるは勿論、信用を得るの途は頭取の人物如何にあり。世人が首と掛け替への大切な財産を預託する處であるから必ずや一般に注意しつゝあるは勿論である。氏は深謀遠慮にして加ふるに温柔恭謙、名利の爲めに一事一物決して苟もせず。人に接し事に當り、駈引きなく術數なく、一言一句其語は肺肝を衝いて出て來らざるは莫く一言にして評すれば氏は徹頭徹尾、誠意の人である。

我國の銀行家に氏以上の財産家もあれば亦地位學問のある人もあるが、尙一點の疑ひなき人物は甚だ少ない。然るに一度氏と對すれば其一言一句は悉く皆信義誠實の結晶として聞ゆるは到底他に見られない氏の美德である。

岸和田紡績株式會社
取締役　寺田榮吉氏

氏は甚吉氏、吉之助氏等に酷似して性は淡快、人に接すれば一見舊知の如く毫も驕り侮ると云ふ風はない。又ごことなく他に見るべからざる悠揚迫らざる美點を具へ眞に温情掬すべき好紳士である。

年齢未だ三十に滿たず岸紡重役中に於ける最年少重役たるに抱らず、社員、勞働者から多大の尊敬を享けつゝあり。前途洋々たる氏のことであるから必ずや近き將來に一大飛躍の期か必到するであらう。

正義と共に生する人は
何れの處に居るも安全なり
（エピクテートス）

貴族院議員
西本健次郎氏

少しく産を成す者あれば世俗直に之を成功者と謂ひ、其手段の如何なりしかは措て問はず、是吾人の容易に首肯し能はざるところである。誠に一歩を進めて觀察せよ、所謂成功者なるものゞうち、如何に多くの不正人物如何に多くの僥倖兒の存在せるや、明治維新の變革に乘じて不當の奇利を占めたる如き、投機場裡に一擢萬金の巨利を獲たるが如き國難に際して所謂火事場泥棒的の私利を圖りたがるが如き、枚擧の煩に不堪。彼等に光明あり、機會を逸せざる敏捷ありと雖も其の手段たるや以て後進の範とする能はず況や彼等の眠中國家なく人道なきに於ておや。是等短見者流の以て成功者となす。

滔々たる實業家輩の中眞摯なる人格と堂々たる手段を以て獨立奮闘よく自己の運命を開拓し遂に巨萬の富を積み其往く處常に國家公共の福祉に終始せざるなく、嶄然として實業界に重きをなせる我が西本健次郎氏の如きを有する事は頗る人意を強ふすべきにして青年諸君の好模範者を得

たるを欣ばずんば非ざるなり。

氏は慶應二年八月十八日、岐阜縣海西郡松山中島村松永家に生れ、明治二十六年九月十五日西本家に入夫となり直ちに其家督を相續し、土木建築請負業を開始し專ら我が鐵道建設請負に心血を注ぎ、其大工事請負入札の事に當るや日本内地は勿論遠く朝鮮臺灣滿洲國に及ぶ、以て如何に其大規模なるかを窺知するに足る。

西本組の齎乎たる事業は眞に我が建築請負業界の白眉にして其經營振りの周到綿密を極め所員待遇に關する遺憾なき設備、寛容鄭重なる優遇方法とは今や全く首尾脈絡完璧し宛然一大常鐘の如く起倒盛衰定まり業界に於て駸々乎として一絲亂れず進展の武歩を示しつゝある業績に到りては直に稀有の偉觀である。

氏は更に和歌山縣の事業界にも重きを爲し現今氏が關係せる諸會社、銀行二十餘社にて名實共に關西財界の重鎭として又紀州の實業界の勢力圏を三分して完全にその一を保つ巨星である。

氏は資性温厚篤實、正事公明、天眞爛熳にして人生行路あらゆる悲風慘雨を經て來りたる所謂

苦勞人にして人に接するや親善を旨とし頗る同情心に富む而して氏は權門に媚びず勢家に諂はず獨立自力を以て能く幾多の困厄窮苦に耐へ今日に到れるもの洵に後進子弟の龜鑑として好典型人物なりと云ふべしである。以上氏の事業及び人物の一端を說述したり、更に言を氏の家庭に及ぼして筆を擱かむとす。氏の令閨せき子夫人は淑德高き賢婦人にして近代婦人の龜鑑として有名な婦人なる事は世に既に定評あり、夫君健次郎氏は關西財界の重鎭、而かも貴族院議員として中央政界に重きを爲せる成功の裏面には、せき子夫人の涙ぐましい内助の功を沒してはならぬ。曾つて夫君健次郎氏が貴族院代表して萬國會議に出席の爲め洋行中紀勢西線の入札があつた其の時せき子夫人は嚴然として令息竹吉、健三、用三、君等を初め幾多の社員に申し渡して曰く『此の工事を他人に取られては西本組の名折れになる。西本の全財産を拋げ打つてても鄕里の爲めだから斷然西本組の手に落札せしめよ』云々斯くの如く唯だ一身一家の爲めのみならず常に愛鄕の爲め老血を燃しつゝある實に近代稀れに見る賢婦人である。

和歌山商工會議所
副會頭　西本竹吉氏

豊頬にして肉附き能く眼元に一種の愛嬌をたゝへその眞一字に結べる口元より時に警句を吐きて四座を壓する概あるも之れぞ和歌山商工會議所副會頭西本竹吉氏の片影である。

偉人か否らず。ハイカラか否しからずさりとて如才なき人にもあらず悠々迫らず。常に温情の掬す可きものありて一個の君士高士の其の胸禁の潔白なる事、風月霽月の如く斯るが故に多く名を求めず。けれども其の高風廉直は以て人の範なるものである。

氏は西本健次郎氏の女婿にして前和歌山市會議員とし市政刷新、市政淨化の爲め一大努力拂はれ其の政治的手腕を一般市民に認められ會ては衆議院議員に推擧されたるも氏は固辭して受けず專ら和歌山市の産業振興の爲めに氏得意の快腕を發揮しつゝあり。

氏は極めて穩健誠實を以て旨とし形式に走らず。議論に抱泥せず。名利の渦中に投せず。情實の淵に陷らず。烱眼を以て西本組の信用を九鼎大呂を重からしめつゝあり。

和歌山を代表する
典型的紳士
垂井清之助氏

人は退いて身を修め家を齊へ、一點の疵瑕なきときは、實に國の良民たるに愧ぢぬ。けれども猶更らに進んで公利を圖り世務を開くにあらざる以上は未だ以て國家に對する義務を盡せりと云ふことは出來ぬ。家にあつて獨りを愼むは固より修身の始めであるが、併し一身の修得は廣く公衆に關する利益の大なるには及ばず。又進んで公衆の爲めに有益な事業を爲すは獨り退きて智識を研くより遙に切要なるものにて、如何に鋭利なる思慮も未だ敏捷なる行爲の價値多きには及ばない。實に人生に於て最も高尚なる希望は、社會公益と人類幸福の增進を圖るにある。然るに我國の封建思想は徒らに足知を戒め、纔に資産を作り漸く生活を支ふるに至れば最早無爲にして化するの弊風がある。

蓋し地方の門閥と稱するもの今尚此の惡風を脱せず。資産あり。信用あり。相當の才識を有する

ものにして依然高等遊民として得々たるものが甚だ多い。之實に國運の進展を遲緩ならしむる一大原因と云はねばならぬ。此時に方り稀有の門閥家を以て喧稱せられつゝある垂井家の一族が夙に時勢の趨向を看取し、協力同心頓みに縣下の産業興隆の爲み努力せられつゝあるが如きは又以て意を強うするに足るべきである。

垂井清之助氏は和歌山市商工界の元老にして關西實業界の重鎭、巨萬の富を有する垂井清右衛門氏の二男にして明治二十九年二月十九日生れの本年三十九才の男盛りである。

氏は温厚篤實、崇高なる人格の所有者にして金持通有性の威張ることなく氣取らざる君子型の紳士である。曾つては市會議員として市民の福利增進の爲め市政界の一方の巨頭として活躍し現在は和歌山商工會議所議員で中堅幹部として同市の産業興隆の爲め善戰善鬪されて居る。

氏は頗る明敏な頭腦の所有者實に温情の掬す可きものあり。だから氏に一度接した誰もが深く印象づけられることは氏の君快そのものと一言のうちにもつ無限の親しみのある事である。又私事、公事に抱らず熱心其のものでご迄もよく市政の爲め商工業發展の爲め世話をせられるから誰もが慈父の如き感を以て氏を尊敬すると同時に垂井さんの爲めなら身命を賭しても働く程に氏が斷然信頼されて居る。

垂井家は代々質業であるが商賣の方は津多子夫人に任せきりで夫人が多くの店員を指揮してゐる世の所謂質屋の主婦と云ふのが冷血動物か多い。故に質屋の主婦の涙を分折したら只塩分と水分のみと云ふ型の婦人が多いが垂井夫人にはそれが斷じてない眞に人間味豊かな婦人である。僅かな質草を持つて零細な金を借りに來る勞働者の細君達の顏と質草と等分に見て『幾らいるのと』聞き直すときには早や津多子婦人の両眼には熱い玉の露が宿して彼女達に滿腔の同情を寄せてゐる。　昔の人が言つた『婦人は實あるを以て貴しとせず、涙あるを以て尊としとす』と斯くして夫君清之助氏が常に高唱されてゐる社會政策の徹底、貧民救濟を叫ぶ言論の價値が斷然光るのである。

何事も他人のなしたる事を成し得べし　（ヨング）

關西織物界權威

久保惣太郎氏

泉州財界の成功者を語るもの必ず先づ指を久保惣太郎氏に屈す。而して氏は如何なる人物にして如何なる性格を備ふるかは苟も氏を知り而して氏を知らんと欲する所にして試みに之を縱横無盡に論ずるに極みて興味深かき事なるを信じ則ち茲に吾人の眼に映じたる氏を捕へ來りて諸君の前に縱横解剖の刄を下さん。

吾人は固より氏と何等の恩怨あるものでなしと雖も深く氏の人物を知つて居る。氏が一個の金に飢へ金を得んが爲めに、否私福を之を念願とする横着者とは斷然趣きを異にして居る。何んとなれば氏の生立と現在とが決して氏をして私福の人たらしむべき金に飢へたる貧夫たらしむべく出來て居ないからである。

勿論金之れ權力也との今の世の中では自然の結果として多くの人が私利の人となり、私腹の人となるのである。殊に現代資本主義にありては此弊風最も甚だしく殆ど此の風を爲して而して此牢習に感染して居るのである。若し氏にして單に私利私福を期するにあらしめたならば君が今日の勢力と財力を以てするなればどんな希望でも達しどんな目的でも遂げられないことはない。けれども氏は敢て其事をせないのみならず、又氏の希望はソンな小さなものではないモットヨリ大きい愛鄕と而して人類相愛の高遠なる理想と遠大なる抱負を持つて居る。試みに氏及び先代惣太郎氏等の出身の跡を案ずるに强ち金錢ばかりのために實業家に志したのでない。否決してソンな考へは毛頭なかつたのである。

久保家は北松尾村に於てでも代々相當の資産を有し常に近隣の村民より尊敬されて居た家柄であり又代々家長は温厚篤實で村内の德望を一身に集めて居た陰德家であつたのである。

元來今から二三十年前の松尾谷の山村は守舊靜止毫も活氣なく自大思想、自己尊大のお百姓が多く村の有力者と稱する連中は唯に自己の榮達、富の增殖に吸々たるものにして如何に村民が生活に困ろうがそんなことは一切おかまいなく富めるものは益々愈々富み貧しき者は益々愈々急迫をつげ全く富の分配の公平を欠き村民の生活狀態は極端に等差があり無産村民は常に有産階級の壓迫に堪へ兼ね自然小作人や日稼業の村民は彼等資産家の横暴に憤慨し遂に先祖代々住み慣れた

愛鄕を見棄て他鄕に移住の止むなきに至らしめた。若し其當時其の儘放任せんか益々村民は減じ衰退なすより他に途がなかつた。けれども所謂地主、山持と稱する資本家は拱手傍觀恬として顧みなかつた。

此の村の現狀日に月に衰へ行く現狀を目擊した、愛鄕心に熱血を燃す先代惣太郎氏は今にして無產村民に職を與へ彼等を救はざれば遂に內田村が滅ろびる……と奮然起つて織布事業を起し吾等に職を與へよと叫ぶ彼等に職を與へ以て他に移住を喰止め失業者を救濟したのである。

而しながら好事魔多しで我利育者の田舍金持連は久保の野郎なにをさらすかと種々なる手段方法を以て防害を加へた。然れ共人類愛と愛鄕心に燃ゆる氏等は紛骨碎身、縱へ身を千々に碎くとも敢て辭する處でないと興奮的彈力は一層猛火となつて久保家一族を發奮せしめた。果然、大果然、大々果然、氏等の正義奮鬪と努力は遂に天の照覽するところとなつて今日の如き巨萬の富と而して關西織布界の覇王となられたのである。

久保氏の關係せる十數の各會社、工場の其經營振りの周到綿密を極め社員、勞働者待遇に關する遺憾なき設備と寬容に鄭重なる優遇方法とは今や全く首尾脈絡完璧し宛然一大常鐘の殿堂である

岸和田紡績株式會社

取締役　關　二郎氏

温言春風の如く温容玉の如しも古いが風彩堂々として人格高く而かも頭腦明敏にして恰も快力亂麻を斷つの手腕を有し雄節夙に信義を重んずる士にて實に我紡績界に稀れに見るの人物である

關氏は長野縣人にして明治四十五年東京帝國大學出身の工學士なり。現に我が紡績界の巨星岸和田紡績株式會社取締役の重職に在りて常に社內和氣靄然として眞に名刀英斷の慨ありて號令一下全工場員を指揮して水も漏らさぬ名將振りを發揮して居る。故に社內無論紡績界に於ても頗る信望、德望の厚きは更に遇然とする處でない。而して之れは決して余輩の過賞でもない一度氏の温容に接したる者は必ずや余輩なき推奬することは更に疑はない。氏の人格、識見、力量、手腕才氣と部下を愛する美風は俗臭紛々たる岸和田紳士中稀れに見る人格者である。

河深ければ水の流るゝこと靜かなり　（センクビーア）

業界周章の拆柄

泰然自若たる

岡　米　吉　氏

冒険は男子の一大偉業である。人世五大浮世夢の如し、はかない生を大魂に寄す。坦々たる大道を踐むも一ト時にして崔巍たたる高山を攀るも亦一ト時である。軟風千里平波浩洋の長江にうかんで悠々鴻雁に伴ふと。激浪狂濤天を蹶り巖を嚙むの大洋に航して風宵雲散、變波極まりなきの偉觀を賞するものとその風流は果して何れであらうか、險難平易、共に人世の行路であるとすれば寧ろその險を冒してその奇を探るの佳致あるに如からんやではないか、深嶺大澤の人跡到らざるが如き地に虎穴あらば進んで虎兒を得べく亦碧流千仞の深淵に蛟龍あらば入つてその領珠を攫む。而して虎兒と領珠を獲れば是れ冒険の報償にして即ち男子の偉績乂此より壯快なるものはない。

現在北濱と堂島に君臨し業界の巨星として燦然と輝く岡米吉氏は和歌山縣日高郡西内原村の出身施乾轉坤の神童は一寒村の小天地にきよくせきとして一生を窒しくすることを許さず。膽躍の志は猛然として終に幼少にして和歌山市寄合町正米問屋松井伊助商店に到り初めて投機市場の人となつた松井氏が明治三十一年に同市十二番町に米穀仲買人となり、岡氏は二十二歳の若冠を以て正米部の主任に擧げられ店の全責任を帶びて努力經營し松井氏をして後顧の憂なからしめ、明治三十九年松井氏が北濱に乘出すや氏は和歌山に頑張事實上松井仲買店の總指揮者となりて經營良ろしきを得たが明治四十一年松井氏より一切讓られて茲に初めて氏の初志貫徹し獨立して岡米吉商店の堂々たる金看板が掲げらそたのである。

飽く迄剛毅不屈の氏は猫面大の一小天地にきよくせきするを潔しとせず更に大翼を東洋の商工都市である大大阪に伸ばし以て一大飛雄を試むべくの意を決して天下の堂島に雄々しく驀入したのは正に明治四十五年であつた以來『斷じて顧客に迷惑をかけない』と言ふのを第一信條として一勝一敗身を危機一髪の間に處して輪贏を轉瞬の間に決して一大活躍の揚裡に立つて戰酣なる事二十有餘年間神謀奇策遂いに其の功を奏し雄然として天下の岡米を以て聲名隆々其雄を天下に謳は

るに至つた。

堂々北濱に進出

果然昨年十二月氏の營業方針の堅實、人格識見、力量手腕を敬慕せる顧客の懇望に依り資本金壹百萬圓を以て北濱株式街に進出し一大店舗を開いた。未だ開業日尚淺きにも抱らず、顧客の註文殺倒し先輩同業者を壓して居る。開店當初は短期專門の豫定であつたらしいが夫れでは客が承知せず、氏を絶對的に信頼せる顧客は現株の委托から各種各樣の調査を依頼して止まず。人生意氣を尚ぶ男子亦知己に感ず。顧客は自分を買つてくれたといふことは大なる知己である。此の知己に對して酬ゆる所以の道は誠心誠意信用第一主義の傾倒にある。紛骨碎身にある、滿腔の熱誠を捧げて事に當るにありと。興奮的彈力と顧客に對する感激とは一層猛火となつて氏を發奮せしめて居る。

岡氏の人格

氏は氣品高尚優雅にして風采堂々、態度の純朴なる禮節自から具はり又思慮周密にして毫も城府を設けず。其の篤實にして寛容、對者をして一種の温味を感ぜしむるものがある。

而かも人の難に赴く任俠の美風と後進を愛撫し親切と同情とを以て常に誘掖に努めて居られる然も一面には冒すべからざる權威がありて當代稀に見る人物である。

大阪地方裁判所判事　岡利裕氏

岡判事は岡米吉氏の養嗣子で現大阪地方裁判所判事である。氏は大正四年東京帝國大學出身の法學士にして博辯宏辭博學多才多士濟々の法曹界に卓越して民、刑、商業行政の各訴ゆく所として可ならざるものなく、堂々大家の稱を專らにして恥ぢざるも之を氏に見る。

氏は大阪地方裁判所名判官として幾多難件を處理して裁斷の公正を以て鳴り名判官として赫々たる名聲を博せり。氏が法律上の智識は飽迄現代高擧に囑し朝發暮改の法律細條に向つて瞥見默讀亦能く胸臆に藏し法廷に立つや訴訟事件の表裏に精進し微に入り細を穿つて餘蘊なく識見卓枝なれば衆人の驚異する所となり、先輩諸官を壓する觀あり天資温雅順直、春風駘蕩の趣きがあり

西田病院長

醫學士　西田佐三郎氏

醫は仁術なりとは徴の生へたる文句で、近來醫は錢術なりと云ふ心細いことになつて了つた。先づ大阪の大病院の先生は有繋都會で立派な學者であると思つて居れば大間違ひ、技術よりも錢術、脈を取るよりも機嫌を取る、機嫌を取るよりも金を取ると云ふ風で富豪權門の患者と見れば柄にもないお世辭を振り撒き、初めの内一回だけは大變利き目のある藥を用ひるが、お蔭でよほど氣分がよい杯と言つたら。最早喰付びたなと言はぬ計りに、其後は成るべく病氣を永引く事に努める。眼病なれば蒸溜水、胃病なれば食塩注射と言ふ風である。甚しいのは立會診察を請へば主治醫は直に先き廻りして八百長をやると云ふことである。

恁る先生に生命を託して置くのは頗る心細い次第である。そこになると地方の醫師は一般に神聖なもので人格の點から言つたら到底都會の先生と同一の談ではない。殊に現在泉州で内科小兒科を以て患者の絶對的信認をうけて居る岸和田驛前西田病院長醫學士西田佐三郎氏の如きは其人格の崇高なる泉州刀圭界稀に見る名醫である。

氏は泉北郡美木多村の豪家西田家に産れ、京都帝國大學を大正三年に卒業したのである。岸和田市に於て開業するや患者に接するに極めて親切職務を執るに最も忠實、其信用と聲望は倍々地方に喧傳せられ、手腕の凡ならざる泉州有數の名醫である。敢て貴賤貧富を別たず。利害に恬淡道の遠近を問はずして其招聘に應じ醫の天職と人類救濟に貢献しつゝあるが如き、吾人は岸和田市の爲め大に意を強ふするに足るべきである。

氏の性格は膺揚寛濶少しも衒驕の態度なく世態人情に通じ泉州刀圭界中唯一人者である。

大丈夫良相とならざれば
必ず良醫とならん　（吉益東洞）

岸和田紡績株式會社

專務取締役　山田宗三郎氏

泉州紡績界に深刻なる學識と手腕を以て大寺田の名參謀として其地位と信望を保存しつゝあるは法學士山田宗三郎氏である。

氏は大正三年東京帝國大學出身の法學士にして曾ては名議長として關西に鳴らした元岸和田市會議長である。氏が我が紡績界の權威岸和田紡績株式會社の主將として貫錄實力手腕を有して社の内外を馳驅しつゝある腕の人であると共に圓滿なる人格者である。其資性は温雅にして高潔淳良にして快濶謹嚴、人を卑しまず、自ら高ふせず。策を用ひて人を損はず、術を用ひて己を利せず。常に正々堂々公道を直歩し未だ曾て横道を行かず、邪道を踏まず、宛然高士の風がある。德望甚だ敦く數千の社員、從業員が神の如く敬し慈母の如く慕ふのも斯うした因がある。

氏は明朗そのもの紳士にして人に對しては決して城府を設けず、常にニコ〳〵顏で應接慇懃極めて温顏、温容、對者に春風駘蕩の感を湧き起せしめる仁者である。

古義眞言宗

管長　高岡隆心師

凡そ世に社會人生を濟度せんとする宗教家の天職は實に崇高偉大なるものである。然るに今日の宗教家程其崇高偉大なる使命と天職を辱かしめて居るものはなからう。彼等は口に衆生濟度を說くも。多くは僞善である。

蓋し宗教家の眞面目は至大なる信仰力に依り始めて發揮し得らるなれ。未だ自ら信仰の力なく熱もなく光りもなき。寺院の俗權を以て人を濟度し、世を救はんとするが如き因より望み得べきことでない。然るに今の宗教家は多くは斯くの如くである。去れば世は擧げて濁り、世は擧げて醉へる今の時に當り獨り澄み、獨り覺めて人の靈性を救濟すべき彼等は反て自ら濟度を受くべき情態に陷入り、口徒らに僞善を唱へて實は放逸淫縱至らざる莫く、或は權力名利の爭奪に日も亦足らぬと云ふ有樣。錦衣緋衣の高僧も權勢を漁つては佛法の大旨を忘れ、學問はまた盛んであるが、靈火的の信仰の志あるものは少ない一山に貧慾の魍魎が横行して我佛敎の末路は方に爛熟の

項點に達し腐敗の徴候は續々として現はれ勞ひ人心は動揺して思想界の混亂今日より甚しきは莫い。此時に當り佛教家中に於て其靈火的の信仰を有し、又其人格的感化力も大にして、能く信徒を嚮導し、天下の人心を歸向せしむるに足る、多くの宗教家を壓し富士の秀嶺の如く天に冲す、

高僧は古義眞言宗新管長高岡隆心師の如きは正に其の一人であらう。師は去る九日高野山金剛峰寺に於て行はれた管長選擧に投票千八百六十三票のうち千七百九十五票の絶對多數を以て當選せられた師の如き有德崇高にして靈火的信仰を有する高僧が一宗一派を超越して萬民信仰の中心である古義眞言宗新管長に就任されたことは欣悅に感ずるものである。

高岡隆心師略歷

本籍　和歌山縣伊都郡高野町大字高野山準大本山寶壽院門主遍照光院兼務住職

出生　慶應二年十二月十五日生新潟縣中頸城郡保倉村大字青野瀨下清兵衛二男

學歷　明治十六年四月十三日高野山中學林卒業

同　廿三年八月十一日眞言宗古義大學卒業

住職　同　廿六年七月四日高野山準別格本山平等院住職

同　廿九年七月廿二日別格本山明王院住職

大正九年三月廿五日準大本山寶壽院門主當選就任

昭和五年三月廿二日遍照光院兼務住職

寺門興隆　明治廿六年住職就任以來平等院明王院成蓮院遍照尊院一乘院等各寺門ヲ興隆ス

教務　明治廿四年五月一日眞言宗古義大學林準教師拜命以來現時ニ至ル迄教育ニ徒事ス

大正十一年三月一日高野山修道院長就任

同　十三年三月廿六日眞言宗高野山大學長就任

同　十五年四月二日高野山大學長就任

昭和七年二月十九日古義眞言宗勸學寮阿闍梨ニ就任

同　八年四月八日高野山大學部々長兼任

山務　明治廿九年七月十六日眞言宗々會ニ對スル本山協議員拜命

同　卅年二月廿六日本山集議ニ當選就任三回
同　卅年六月十三日高野山中學事務員ニ當選
同　卅二年二月廿七日金剛峰寺教議所會計課當選
同　卅三年九月十九日金剛峰寺教議所庶務課兼興隆會庶務課當選就任四回
同　卅三年一月十日高野山々林課當選
同　卅六年八月廿九日本山常置員會議員當選就任三回
同　四十二年十月三日本山評議員會議員ニ當選就任二回
同　四十五年七月十三日金剛峰寺顧問會顧問ニ特任
大正十年六月高野山住職會議員當選就任
同　十四年一月十九日金剛峰寺留學生貸費生詮衡委員ヲ囑托就任
昭和三年三月十日御遠忌參與任命
同　四年五月廿日高野山内協議員任命

同　五年二月廿五日伽藍復興協議員囑托
明治卅四年十一月一日眞言宗高野派宗會議員當選就任二回
同　四十一年十二月三日眞言宗大中學科目ニ布教科實施法詮定委員
同　四十二年三月十五日眞言宗各派聯合高野山大學勸財學團評議員
同　四十四年十二月七日眞言宗各派聯合大中學財團監事
大正四年九月廿三日眞言宗各派聯合宗會議員ニ特選
同　八年五月十二日眞言宗法議調査會顧問
同　年六月二日眞言宗學階評議員拜命四回
同　十三年四月一日眞言宗高野山大學評議員
同　十五年九月十七日眞言宗高野山勸學財團理事
昭和二年三月七日古義眞言宗總本山金剛峰寺看宿補任
同　六年七月十日留學生及貸費生詮衡會員特任

社會

明治廿七年十月十四日日本赤十字社終身社員

同　卅四年三月日本武德會々員

同　卅五年五月日本風俗改良會々員

大正十五年十二月一日古義眞言宗社會事業協會名譽會員

定額位

大正六年十二月廿日東寺定額僧當選

僧階

大正十一年四月五日權大僧正補任

學階

大正十五年九月七日碩學補任

宿老

昭和九年年三月廿一日古義眞言宗宿老特補

賞

大正九年八月十一日高野派管長大僧正土宜法龍師ヨリ教育上ノ功勞ニヨリ小五條ヲ褒賞受領ス

大正九年十月卅日高野山大學總理大僧正土宜法龍師ヨリ多年教育上ニ盡瘁シタル功勞ニ依リ賞品受領ス

昭和三年十一月十日國家ノ御慶事ニ際シ多年宗務ニ盡瘁シタル功勞ニ依リ古義眞言宗管御大僧正龍池蜜雄師ヨリ表彰賞品受領ス

同御即位式御大禮ニ際シ教育功勞ニ依リ桐花御紋章附硯箱一個ヲ文部大臣從三位勳一等勝田主計閣下ヨリ表彰拜領

同御即位式ニ方リ昭和三年十一月十六日饗饌ヲ賜旨宮內大臣一本喜德郎閣下ヨリ案內ヲ拜ス

天皇陛下　昭和四年五月廿三日大阪行幸二府五縣ノ大中小學生々徒ニ御親閱ヲ賜ニ付長陪觀ヲ可被差許旨案內ヲ拜ス

昭和五年十二月十日全國私立大學長會議田中文部大臣ノ招集ニヨリ上京文部大臣官邸ニ於テ十一、十二兩日開會十三日午前九時御召ニ依リ參內於鳳凰間、陛下拜謁ヲ賜フ別室南溜ノ間ニ於テ御茶菓ノ御饗應ノ御恩命ヲ拜ス

昭和六年十一月廿六日新宿御苑觀菊會ニ宮內大臣一木喜德郎閣下ヨリ御招待ノ案

内ヲ拜ス

天皇陛下　昭和七年十一月十六日大阪行幸ニ府五縣大中學校ノ學生々徒ニ在鄕軍人等諸團体ノ御親閲ヲ賜フニ付御陪觀ヲ可被差許旨案内ヲ拜ス

昭和八年四月廿日新宿御苑觀櫻會ニ宮内大臣湯淺倉平閣下ヨリ御招待ノ案内ヲ拜ス

良將は主を擇びて仕へ
良禽は樹を擇びて棲む

（清人俗諺）

和歌山綿布株式會社

社長　福島嘉六郎氏

實業界は最格なる意味に於て常識の戰場である。實業家に常識を要するのは、猶軍隊に各種各樣の武器を要すると同一である。

單に今日といはぬ、孰の代如何なる時代にも此くの如き常識の人は必要である。就中今日の如き過渡期の實業界には、切に其必要を感ずるものである。所詮過渡期の犧牲者たるべき實業界の偉人物は吾人に向つて常識の發達を敎へ、鍛練を敎へ、應用を敎へ、更に効果をも敎へつゝある實業家に取りての常識は或意味に於てパンよりも冷泉乃至衣服資本よりも、必要品の一となつてゐる。常識は大資本である。大才能である。大建築物である。更に大信用である。彼れの前には、資本、建築物、果して何爲るものぞ。福島嘉太郎氏は和歌山市實業界に於て、最も常識の發達したる實業家として和歌山綿布株式會社以外にも大いに羽振りを利かしてゐる。

氏は非常に學問したといふ人でもない、だが其才能、見地、手腕、人格を見るに大學者などは

氏の足許にも寄れない。而して氏には慥かに一の天品がある、即ち其發達せる常識である。氏の熱誠、氏の奮闘、氏の精力、氏の人間味は此の常識から發揚から轉化したものである。

氏が綿布會社の社長として同社の爲めに鋭意之れを勉めつゝある、其の經營が現實は、移つて氏の常識を遺憾なく發揚してゐる事が知られる。更に又發達せる常識を有する氏の口より出づる言は多くの人を活かし、亦救ふの力がある。宛かも天來の福音のやうに……

而し氏は必ずしも人を救ふに足るほどの雄辯ではない、然れどもソコが發達せる常識の力は格別である。故に其の言には無理がなく。片手打がなく、極めて公平に、極めて誠意を披瀝した處が見らる。隨て其言ふ所眞理を含まれてゐるものである。

常識の人は何事も自己の常識から割出した談論よりせない。デあるから其の議論は直である、正である。牢强附會な處がない、況んや烏を鷺と胡魔化すをや。

福島氏の公平な議論と眞理ある言論には敵はない、宛かも仁者の敵のないと同一である。氏の會社に働く數百の社員。勞働者は皆氏の言語を神の福音と聞いて居る、否や會社内だけでない、華城財界に重を爲せる所以は氏の生命あり、活力あり、眞理ある言語に因るものである。

岸和田市會議員　今村庄平氏

正義を愛し邪曲を憎み常に侃がくの議論を爲して岸和田市議中の一異彩たる事に於て何人にも讓らざる者は今村氏であろう。故に市民より深き尊敬と信賴を博して居る。

氏は一見貴公然たる平凡のやうに見えるが時には言々句々火を吐き風を生ずときもある。而かも其論旨は明晰にして能く正鵠を得て居るから如何に、氏に反對の士と雖も一度氏の所說を聞かば肅然として襟を正し翻然として悟る所がある。氏が頭腦頗る明晰なるが故に慧眼能く理非を省察し熟慮果斷の美風がある、而も人に接するに恭讓温容慈顏を以てするが爲市民が其人格に悅服し其德になつかざるはない。氏は元來數萬の富を有するが故に所謂岸和田紳士の通有性なる金持連のお機嫌とりに汲々として自己の榮達をはからんとするが如き淋し考へは毫も持合はない、名利に奔りて義を輕んじ鷺を烏すと胡魔化すやうな醜態は絕對に演じない、實に公人としては近代の要求にピッタリと合致した理想的の市會議員である。

家業は代々藥種商にして岸和田隨一の信用と盛大を致せる今村藥局の經營者である。

金井病院長

醫學博士　金井德次郎氏

人に人格の重ずべきは今更言ふまでもないが、就中醫を以て業とするものは最も爰に意を致さなければならぬ。一概に云ふ譯けには行かぬが、人の病氣の多くは精神狀態に關係するものである。されば病人其者は醫師の提供する藥液が果して自己の病氣を治癒する上に於て、適當なるや否やを自覺するもの尠ない。何れも醫師の人格に信賴して、天地も代へ難き生命を託するものである。諺にも『病が氣から』と云ふことがあつて、彼の醫師の診察を受くれば必ず治癒するものであると確信すれば藥の効き目よりは寧ろ其精神作用が治病上大に効果があるものである。又彼の醫師の診斷を受けて治れば項上、縱し不幸にして此世を去つても本望であると云ふことは往々聞くことである。

恁る信賴を受くべき大責任ある醫師が、利慾の爲めに匙加減すると云ふに至つては罪惡も此より甚しいことはない、然るに近來醫道の頽廢甚しく徒らに門戸を張つて俗世間を眩惑し、金錢の爲めに大切なる病人を愚弄し、胃病には塩水を注射したり。眼藥には蒸溜水を注して金を取ると云ふ、惡德醫師は大阪に往々あるやうである、けれども當該病人は素人である。宜しく此邊の事は醫師其人の人格に信賴する外はない、而も大阪には人格の士が鮮くないと云ふに至つては實に慨嘆に堪えない次第である。

然るに偶々神秘的の醫術と崇高なる人格を兼ね備へ其天職を全ふしつゝあるものは大阪市南區安堂寺橋通二丁目に偉觀堂々たる內科專門金井病院長醫學博士金井德次郎氏である。

氏は三十そこ〳〵で博士になつた秀才である。關西刀圭界の權威佐多博士は曾つて氏を稱讃して曰く『內科は金井に習へ』と言つたそうだ。

氏は又貧民救濟事業に對して非常に熱心な人で堺市より懇望されて堺市立公民病院長を十年間も勤續し堺市公民病院は全國に於ける模範病院なりとの定評を博し且つ二回も勅使派遣の光榮を有した事も全く博士の努力奮鬪の賜である。博士は其職務には非常に熱心であるが曾て博士は患者の診察中に博士の愛兒が泣いたことがある。その時博士は子供が泣いてゐては診察が出來ない

とあつて自分の愛兒に眠る注射をして其患者を診察したと云ふ挿話がある。今日の時代に斯くの如き職務に忠實な醫者が將して幾人あるか。

昨年秋公民病院長を辭し現在の處に病院を新築し一般患者の診療に從事するや博士の神手に接し一代の運命を決せんものと患者は常に門前に集り頗る盛況を呈してゐる。

博士は性温順篤實患者に接して親切、加ふるに一種の趣味と愉快を以て診療に從事すると云ふに至つては當今の醫界には稀に見る人物である。

徳は不詳に勝ち
仁は百禍を除く
（烈女）

北濱の寵兒

辻楠松氏

現方北濱に於て新進氣鋭。信用頗る厚きを以て三面六臂の勇を揮ひ大いに將來を囑望の焦點となつて北濱に奮闘活躍する所の人は辻楠松氏である。

氏は泉州岸和田の出身である、吾人は氏に於て泉州人が有する總ての特長を見る、否その風采態度や既に泉州人たるを表象して餘りあり、豪宕なるが如くにして然も如才なく、放縱なるが如きの中に自ら秩序あり。疎放なるが如きも事を處するに思慮周密、武骨なるが如きも奇略縱横辭令巧みならざるがごとくにして大ひに交際の術に長ず。時に獨斷敢行頗る大膽なるが如きも亦翼々として些事に憂慮することなしとせず、氣骨稜綾の間亦利に疎としとせず。

氏が莞爾としてその得意の經濟界を論ずるや頗る饒舌にして警鐘のごとくその繁に堪へざるごときも亦一種掬すべきの愛嬌ありてよく敵手をして傾聽せしむ。その店務を處理し店員を督するや不得要領なるがごとくにして然も頗る要領を得るの點に於いて亦北濱の一雄鎭たるを失はず。

氏に對し或る者は貶して衒氣紛々近よる可からずと、然して賞讃者は云へり、氣宇豁達の快男子なりと。蓋し共にその半面を見たるに過ぎざる可し、武辯なるがごとくにして才人なるが如くその極端にして然も矛盾せるがごとき氏の性格は勢ひ世人の毀譽褒貶を免れず、その窺ひ知る可からざる點こそ方に辻氏の生命にしてその特長である。質朴の人乎、將亦羈氣滿々たる野心家乎吾人得て之れを知らず。所謂氏の特長と云ふの外以上を斷じて難いのである。

國は大なりと雖も戰を好めば必ず亡ぶ、天下平かなりと雖も戰を忘るれば必ず危し

（史　記）

南紀に君臨する製材王

清水庄太郎氏

近時成功談なるものは大いに行はれ政治家となり。金持となりたる人の經歷等が新聞雜誌に載せる、こと多きが故に青年の心は動もすれば浮足となり、何か世間に名の聞ゆる程のものとならねば自から意氣地なき樣に感じて居るものもある。

而したとへ身は草深い田舍に住むと雖も其心掛によりては大臣富豪よりも寧ろ深く、强く國民の進歩發展福利增進に貢献し得べきことを覺らぬもの多ければ今此處に其對症の藥として近時稀らしい隱德家清水庄太郎氏の如きは亦逸すべからざる人物である。

清水庄太郎氏は和歌山縣西牟婁郡田邊町に在住し縣下有數の製材業者である。氏は所謂田舍金持の通有性たる威張りたがる事は斷じて嫌いで賣名の爲めに會社の社長や重役に成りたがらない況んや政治的方面には野心がなく、若し清水氏の今日の富と勢力を以てすれば縣會議員や社長や

重役の五ッや六ッは茶飯事である。

けれども氏にはそんな野心が毛頭持合さない、飽迄地方産業開發の爲め終始一貫して居る。

元來紀州は木材に惠まれた國であるが田邊附近の製材業者の其多くは保守的にして進取的の思想に乏しく自から抽んで他の製材業を凌駕し紀州材木をして更に一頭角を現し益々其販路の擴張を企つるが如きは稜綾として震星を見るが如し僅かに自己の利益のみに是々汲々として敢て他を顧みず甚だしきに至りては同業者をして製材上に妨害を加へて恬とし恥ずる色なく全く一時を眩暈すべき粗製濫のものを製材し販賣する輩が續出し、從つて取引先に製材業者を輕視するの傾向あり て自然斯界は頽頽するより他はない。これを清水氏が非常に憤慨し夙夜別なく自から第一線に起ち総ゆる犠牲を拂つて努力奮闘爲しつゝあり、

亦製材の副業として建築請負業も營み斯の有名な新興温泉場として音に名高い白濱、湯崎温泉場の各旅館其他會社温泉浴場等はすべて清水氏の手に依つて建築されたものである。亦其方面に於いても南紀唯一の請負師として羽振を利かして居る。

氏は熱誠と商業道德の遵守を唯一の武器として縱横無盡に活動せられるので各方面から多大の信望と尊敬を拂はれて居る。

資性温厚篤實、明敏な頭腦と任俠的の美風とを多分に所有して居る。現在南紀方面で時めく名士で氏のお世話になつた人々も相當に存在してゐる、一度氏に接した誰もが深く印象づけられることは氏の明快と男性的そのものと一言のうちにも親しみのある事であり。亦人から頼まれたら道理の在る事なれば斷じて後へひかず、どこ迄もよく世話をせられるので誰もが慈父の如き感を以て氏を尊敬すると同時清水の老爺のためなら身命を賭しても働くと無産大衆から絶大なる信頼されて居る。

百戰百勝は善の善なるすのにあらず戰はずして
人の兵を屈するは善の善なるものなり　（孫子）

衆議院議員

玉置吉之烝氏

政治家に尊ぶ所のものは内に高遠なる政治上の理想を有し外に之れが實行に努むると共に主義主張に由つて終始し而して其志操の堅固不拔なる所にある。斯くして始めて眞の政治家と稱することを得べし。蓋し政治家に主義主張なきものは恰も船に羅針盤なきが如く何等の用を爲さざるのみならず、寧ろ國家社會に害毒を流すものと云はねばならぬ。政界の腐敗、國政の廢亂は總て此種の政治家が世に多い結果である。

而も政治家と稱して國政を安定し民衆を指導せんとするに至つては危險之れより甚だしいことはない。然り我國政治家と稱するものが滔々として皆此の有樣である。されば憲政實施以來既に幾星霜政界は腐敗に腐敗を重ねて互に利を射るに汲々たるが如き少しも怪しむるに足らぬ。

此秋に當りて高遠なる理想を抱き堅實牢固なる主義主張に由つて進退し常に國家公共の福祉に勇奮邁進穩健着實なる玉置代議士を得たるは實に我國の精華と欣ばずば非らず。

玉置氏が和歌山縣海南市内海町の出身である。氏の政治的の發露としては當然經なければならぬ階段を順序よく。而も常に無難に縣會議員其他地方の名譽は何に一つとして缺かさず經て來て居る。往訪の記者を迎へていと快く引見された氏の時の民衆的の態度は流石無産大衆に絶對的信認され彼等より神の如く尊敬されて居る近代人の要求する民衆政治家だナーと驚かざるを得なかつたその温容な風貌亦人を魅するところあり即ち德を以て廉潔な性情を自然に發揮するやらに思はれる。多辯を弄せず、一言一句悉く國民の福利增進、非常時國難打開の實に花も實もある話のみ、時に産業振興を論ずれば又人世の處世の道を說き或は青年鞭韃の快氣焰を聞くその氣魄の凛とした處は或る意味に於て古武士的であるとも云へる。所謂花も實もある代議士と云へば恐らくは此の玉置氏の如きを指すのだらうと思ふ。氏は中央政界に於いては政友會幹事して任を全うし選擧區にありては斯くの如き頗る温情掬すべき應接と溢る人間味と而して又私事公事に抱らずよく人の世話をせられるから誰もが慈父の如き感を以て畏服せして居る。兎に角温情主義にして敵も味方も求めない、只幸にして自己の誠意と德望が對者に迎合するならばそれで可なりといふ内剛外柔淡快な性情は現代政治家に稀れに見る奥床しい點である。

高野山

準別格本山
三寶院住職　關榮覺師

鷲峯高くして達し難く、恒河廣くして渡り難し、一生の苦行尙大師の靈光に浴して衆生感化の德を養ふ事、容易ならじ人欲限りなく煩惱止むことなければ盧榮の花は悟道の晨に笑ひ酒色の甘露は南嶺の夕に薫ず。此の誘惑を避けんと欲して避くること能はず此の迷惑より去らんと欲して去り難きを如何にせん、あはれ惡魔外道の威力亦强き哉、宗教家は必ず此の境界を經過せざる可からず。故に隨落腐敗する者多くして眞に其の天職を全ふする者稀少なるなり。

茲に高野山三寶院住職關榮覺師の如きは世に類少なき佛弟子にして精心難行自ら標示して佛道を布敎せんと欲する名僧なり。師は風彩堂々として人格高く而も頭腦明晰にして恰も快刀亂麻を斷つの手腕を有し曾ては海外布敎師とて遠く布哇に渡り全島に世界的の高僧大德弘法大師の大精神を普及徹底島の隅々迄弘張せしめた愛山護法に老血を燃やしつゝある近代の豪僧にして萬人敬慕措かざるところなり。

又古義眞言宗は勿論高野山當局の名職を何一ッ缺かしたことなき重要人物である。

『三寶院略緣起』

承和年間大師の御母堂、大師を慕つて當國に來られ山麓慈尊院に一宇を建立して三寶院と名づけ觀道の僧を選びて住持せしめた、是れ當院の濫觴である。母公山上の嚴しき寒さを思ひ遺られ爪劈の粃を以てあまざけを釀し三寶院をして大師の許におくらしめた、その嘉列今に贊ることなく毎年正御影供に當院より獻備して居る母公入寂の後、三寶院を當院に移し母公創立の名刹と稱へて碩學高德の龍象相嗣ぎ千有餘年に及んで居る、就中、觀中興驗士人は聲明の達人南山進流の元祖であり源空明珠房は俗名杢主允友時といふ平家の武臣であつたが文治元年平中將重衡南都に於て梟香せられたとき其首を乞ひ受け當院に登り埋葬して苦提を弔ひ、後發心して當院に住し大ひに興隆せられたと云ふ、又行淸禪觀房は當山二十七將の一人、遊佐越前守の未子である。應永年間登山して當院に住せしが大衆より推擧せられ山上山下の行事を職に掌り遂に檢校に補せられ

た高德である。

德川治世には寺格上通に列し院領高三十五石本尊免七石及爪劈酒料二十三石合せて六十石を領し尙奥州二本松城主丹羽家越後新發田城主溝口家、及松平河州侯、中山志摩侯等大檀主の歸依篤く領内の土民悉く檀契を結び寺門隆昌を樫めた現在の本堂坊舍は約二百年前享保十三年の再建にかゝり當時の面影を偲ぶに足るものがある、併し維新後寺緣を奉還し漸く衰頽せしを現住關榮覺僧正が修正を加へ大ひに增築して舊觀に勝る盛況を呈してゐる。

親を愛するものは敢て人を惡まず
親を敬するものは敢て人を慢らず
（孝經）

和歌山商工會議所

會頭　前田辰之助氏

和歌山商工會議所は市の產業の心臟部である。其活動の如何は直ちに市產業界に大なる影響を與へるものである。

會議所の會頭なるものは製產工業家を戒め、一面商賣人には不正を戒め得べき德望を有し他面に於ては對外的販路の擴張に努むるの才腕を要す。此二の大條件を具備し而も人格識見、力量、手腕を有するものでなければ當然會頭たるの資格なきものにして此の二大條件を具備するものを求むるのは中々困難な問題である。

此點に於て我前田辰之助氏の如きは實に其會頭たる資格を何れの方面より觀察するも會頭として十二分の資格を具備する眞に理想的の會頭である。氏は明治三年六月五日和歌山市南材木町に生る、前田家は代々酒造家であつて一時は西の宮、京都、伏見等に釀造場及釀造會社を設立し自ら其社長に就任し、關西釀造界の一方の雄鎭として天下に鳴つたが、元來氏が各の事業會社の社

長重役の重要人物であるが又人の世話を能くする。

『人の世話』をすると云ふことは誰もが好くところであつて而も實際の場合に遭遇すると却々出來ないものである、又世話をしても何物が其代償を求むる心の起るのは人情で若し世話をして遣つたその人が、自分に反く樣なことがある場合、腹立たしく思ふのも亦人情である。

此點に於て我が前田辰之助氏の人の世話振りは徹底して居る。第三者から見るときは、夫れが物好の樣にも見へ、又氏の道樂かの如く思はれる位に能く人の世話をする、氏の世話振りは恩を着せる心でない、代償を得んとする心も毛頭ない、唯だ人の爲め人間相身互だと云ふ眞の同情から迸り出づる誠意の發露に外ならぬ。

前田氏から種々と世話を受けた人々は相當に多い、前田氏は禮を云ふて貰ふと云ふ心は毛頭もなかつたが、不思議にも氏の世話をした人は何れも成功して居る、成功せぬまでも順調に行つて居る。而して世話を受けた氏を德として居ることは又大したものである。

會頭の前田辰之助氏としは縣市の事情に精通し細大の別なく處理し得る手腕と頭腦とを有し冷

靜にして而も情誼心に富み市産業界の棟梁として周到なる注意と懇切なる指導とを以て會員を愛撫するなど眞に新興の意氣に燃ゆる和歌山市の會議所會頭として適材適所の觀がある。

氏は亦外柔內剛、その人に接するや極めて眞摯に而も何等の圭角を有せざるも其主張は容易に枉げず、頗る雄辯といふでもないが惇々として倦ず、また聽者を滿足せしむるの辯を持つて居る

斯くして常に市の商工業發展の爲め會頭の責任を全らし末だ曾てその使命を辱めた事が絕對にない。此の手腕、此の意氣こそ會員は勿論全市民の負託する處で和歌山市の大恩人である。

斯くすれば斯くなるものと
知りながら止むに止れぬ大和魂

（松　陰）

熊野自動車株式會社

專務取締役　田中音吉氏

南紀で熊野の田中さんと云へば殆ど知らぬものはないほどに有名な勢力家である。田中氏は見たとこころデブト肥つた小柄の見るからに人好しの氣の低い交際のし安い人である。いつもニコ〳〵と笑顔を以て人に接するので土地人は勿論京阪神の紳士紳商から愛されて居る。けれども理窟に合はぬことを爲す奴には忽ち大聲一叱對手を蛭に鹽をブッカケた樣にする力量を有して居る

元來田中氏世話好きでよく難儀なものを助ける。誠に仁俠に富んだ男らしい男だ。今日田邊町は勿論南紀方面の政界は勿論經濟界の紛擾には大抵顔を出して始末をつけて居る。田中氏が來たと云へば一切の理窟を拔きにして丸く納まる。別に大した教育があると云ふ驛でもなし縣會議員をやつただけで去りとて世の所謂俠客と樣に多く乾分を有つて拳骨を飛ばして對手を脅すのでなく社會の爲めなら身を粉にしても厭はぬと云ふ熱心と正義のため公利公益の爲めには火の中。水の中も辭せないと云ふ。此の誠意を唯一の武器として何事も文配して居る。

だから田中氏の仕事には無理がないチットモ片手落がないから何人と雖も從ふのである。蓋し眞に世の中に俠客と云ふものがあるとするなら田中氏の如き人物を指すのであらう。斯うした人物を得たことは全く南紀の誇りである。

『南紀交通界の大恩人』

南紀方面は頗る交通不便で鐵道のない郡どころか宗全な道路すら持せなかつた東西牟婁郡の交通不便を痛感し田中氏は卒先して熊野自動車株式會社を起し田邊町を起点として大邊路街路串本迄と中邊路街道本宮迄の交通機關として日に五回バスを走らせ同地方の交通に多大の犧牲を拂つて努力した功勞者である。

泉州醫界の長老諏訪常吉氏

古きを尊む我國の風習は、家柄の古きを以て社會的の尊敬を受け、又商人が老舗を重ずることも甚だしいが、此と同時に刀圭家の如きは尙更ら家格が必要である。其一例を擧ぐればロンドンの或名高き老醫の談に曰く『私か醫師になつ初めに、バーソロミエ病院に居つた。所が或日一人の田舍者が來て、コンナ不思議な腫物が出來て、田舍の醫者がエー癒さぬソレで態々貴院へ參上したので診察して下さいと云ふ。そこで早速診察したが。實は私にも分らぬ如何にも不思議な腫である、ケレ共職務上分らぬとも云へぬとも云へぬので、よい加減なことを云つて御茶を濁ごし傍にありし膏藥を塗り付けて歸した。其膏藥は豚の脂に何か少し入れたもので之より太しものけはならなかつた。然るに翌日患者がヤッテ來て、大きに具合がよいと云ふ、診察して見ると先きに眞紅なりし腫物が大變によくなつて居る。又豚の油を付けてモウ直に癒ると云ふと、患者は流石に名高い病院だけあつて偉らい、田舍の醫師では癒らぬが當病院へは一度來た丈けでコンナになほつたと悅んで歸つた』此の談話は所謂爾の信仰爾を救へりで、病院の老舗が精神的に治療したと云ふ告白である、這は併し獨り西洋の話だけでない。我國は尙更ら家格が必要である。

されば諏訪常吉氏の如きは岸和市でも一、二を數へられる古い開業醫で岸和田の諏訪家と稱して泉州醫界の代名詞たるに至つたものである。氏の漆黑の美髯を見ただけでも病氣が癒つたと云ふ患者がある、斯くの如く病める者より絕對深刻な信賴を受けて居る、現在泉南高等女學校、岸和田市の囑託醫であり市民の公衆衛生の爲め偉大な功績のある名醫である。

性恬淡寡慾、當今醫界の弊風たる、利害の爲めに患家に阿諂する幇間的のものと異り毅然として醫家の神聖を重んじつゝあるが如きは、腐敗墮落の刀圭界に稀に見る人である。

眞智は斷乎たる決定にあり

（ナポレオン）

諏訪病院長

醫學博士　諏訪幸雄氏

古來醫は仁術なりと稱して人を救ふを以て天職となし淸貧自ら甘んじ俗界に超然して名利を趁ふものあれば大に之を賤んだものである。隨て宗教家と同じく長袖と稱して社會的の尊敬を受けて居つた、然るに晩近激烈なる生存競爭の結果は刀圭界を風靡し今や全く古の美風は其地を拂ひ醫術は一箇の營業となり利を爭ふこと商人も啻ならずと云ふ有樣である、殊に都會に甚しいやうであるが、這は併し獨り醫師を責むる譯けには行かぬ。患者の方でも昔は單に長袖として尊敬する而已ならず、年末年始の賀禮は固より患者の有無に拘はらず相當の附け屆けを以て生活の料を贈つたものである、然るに今は喰ひ遁げ患者も隨分多いやうであるから罪は患者の方にもあるのであるけれども何ふしても吾々の頭には醫を以て一種の營業人と見做すやうな輕薄なる印象はない、故に相當の敬意を拂つて見たいが哀しい哉、敬意を拂ふべき人が甚だ鮮ない、然るに偶々醫學博士諏訪幸雄氏の如きは此鮮けき中の一人である。

氏は泉州杏林界の元老特に內科に最高權威として令名赫々たる名聲を博せる諏訪常吉氏の令息にして大正十年京都帝國大學を卒へ在學中より其專攻とする產婦人科の得意の神術を以て世の婦人のために崇高なる決心を以て學窓を出で、恩師岡林博士の推奬により滋賀縣公立彥根病院副院長兼產婦人科部長に招かれてその榮職につき滿三ヶ年間實際につき研究の傍ら世のあはれな無產婦人のために多大の同情を有し彼女等のために全く名利を度外視し眞に犧牲的に努力せられたるが故に曾つては滋賀縣の無產婦人等より吾々の救世主よ吾等の慈母よと尊敬を拂はれつゝあつたのである。

然るに氏の超人的の醫術を敬慕せる鄕里の有志の懇望に依り嚴父の膝下に於て昭和五年九月現在の場所に從來の諏訪醫院を病院組織に變更し院長として靈腕を以て一般患者に接してゐる。その患者に接する態度は實に懇切叮嚀をきはめ一度君の手に握られるや患者は神の如く敬し慈母の如くしたしみつゝあり。唯君の神手に信じて一代の運命を賭するのである。人は信任を受ける程

責任の重きを感ぜるはなく、いはんや醫術の如きは人の生命を支配するのに至りては尙更にその重きを感ずべき筈のものである。さながら世に多くの巧利維れ趁ふの輩は患者を一商品視してこの間貴賤貧富の別を置きその待遇施術に手心を用ふるの多きに反し君の如きは醫術の眞諦を最も有意味に會得し當今醫界に稀に見るの人物である。

末だ開業尙日淺きに抱はらず先輩諸士を壓し常に門前市をなすが如き患者は引續いて來診將又往診を求めて居る。

流石に我國產科婦人科の大權威京大教授岡林博士の秘藏兒だけあつて、その醫術の優秀なる病める者のためには拔くべからざる甚大なる信用を得つゝある事實は之れを雄辯に物語つてゐるものである。君の性格や溫和實直玲瓏玉の如き品性を有し其前途や實に洋々たるものあり。

名聲は高貴なる行爲の芳香なり　（ソクラテス）

和歌山市の大恩人

長老　垂井清右衛門氏

卒然として見れば容貌魁偉、威風堂々恰も戰國時代の闘士の如く、少しく語を交ゆれば又言外に其溫かき心情を認め得べく、若し深く親まんか義俠に敦く同情の念に富み率直なる好個の紳士たることを知る、之れ我が垂井清右衛門氏となす。而して氏は又最も意思の雄健にして奮闘的の人物である即ち其雄健不拔の意志と奮闘的の性格とは遂に今日の地位を贏ち得たる所以である。

垂井氏は和歌山市旅籠町に生れ、家業は代々質商である縣下に於ても屈指の富豪にて名望家である。氏は殆ど育英事業に從つてゐたがその志は頗る遠大高遠にして產業立國の大志を抱き而かも和歌山縣は交通極めて不便なるを甚だ遺憾とし明治三十年大阪と和歌山市を結び付ける爲めに當時華城財界の巨頭松本重太郎氏と相謀り紀泉鐵道を起し大いに交通運輸の便を招き更に又和歌山市實業界に實業界の發展に資すべき機關のなきことを大いに憂ひ、明治二十一年商工相談會を

起し選ばれて副會頭に擧げられ翌二十二年市會議員に選ばれ前後二十年間議員として市政發達の爲め盡瘁し而かも自治會派の驍將として空飛ぶ鳥りも落したり。

先見の明と鄕土愛に熱血を燃す氏は我が和歌山市は綿ネルの主産地なり、然る此の主要物産の紀州ネルの特産地に完全なる染工場を有せないことは斯業發展上一大欠點にて、業界は勿論地方の不利是より甚だしきことなしと自から第一線に起ち同志に語り染工場を起し苦心研究の結果完全無缺な染色を發見し以て今日同市の染色加工の異常なる發展の基礎を築き上げたる大なる功勞者である。

其事蹟の赫々たる名譽は明治三十一年十月十日時の和歌山縣知事正五位勳四等野村政明氏の協賛賞は最も事實を雄辯に物語るものである明治二十九年に和歌山電燈株式會社を組織し社長に擧げられ、仝三十一年和歌山織布株式會社取締役となり更らに同年和歌山商業會議所議員に當選し常務委員の重責に就き、三十五年内國勸業博覽會和歌山協賛會理事に推選せられ同三十七年遂に和歌山商業會議所の會頭に擧げられたのである。

氏が公人として經歷は概略以上の如くである、要するに垂井氏は奮鬪的の人物にして嘗に自己一家の爲めのみならず常に公共の爲めに奮鬪し民衆の爲めに活動し或は市政の爲めに奮鬪し又は國家の爲めに産業立國の爲めに絶えず盡瘁せられたる和歌山市の大恩人である。

而も氏は謹厚篤實悠膺たる風采は一見恬淡なる富豪の如く感せしむと雖も而かも世に處するや飽迄民衆的にして商人的態度を以て勤儉質實を專らとして利を見ることを最敏。近時牢れに見るの實業家である。

人生は勞力を費さざる人には一物をも與へず
（ホレース）

智者は希望に依り人生の苦痛を忍ぶ
（ユーリピデス）

金剛峰寺

執行職　德守清鳳師

方今佛教界の教徒を以て任ずるもの多くは祖師を賣り佛を賣り流石は本職丈けあつて其宗教に就ては能く釋き能く演じつゝあるも、而も口鼻は未だ酒色に蕩き耳目は猶も美形に迷ひ俗臭紛々恬とし愧ぢざるもの如く、只管村閭の善女善男を瞞着して唯自己の懐ろを肥さんと而已を謀つて居る有様、所謂身を省みて社會風教の師表たるべきもの果して幾人あるか、甚だしきに至つては旅行中法衣を纏うを以て潔とせず却て俗人の風姿を得意とせる生臭坊主の横行する世の中に吾人は高野山蓮花院住職であり、且つ古我眞言宗總本山金剛峰寺の執行職の德守清鳳師の在すを悦ぶ

德守師は學德共に高く殊に佛典に通じ宗内の尊信最も敦く千波萬波　波瀾曲折の宗内平和の爲めに師の存在は誠に適材適所に配置せるものと云ふべく、師は當世高襟坊主と其選を異にして圓頂黑衣、内心には金剛堅固の信念を藏へ名利を衒はず俗流に陷らず毅然として宗風の顯揚に努めつゝある高僧である。浮華衒耀を以て世に非難ある我佛教界の一異彩である。

『準別格本山　蓮花院略緣起』

當院は弘仁八年弘法大師が當山開創の時に惡魔降伏の爲めに軍荼和明王の秘法を修して結果せられた草庵である。敬に本院は大師の開基である第一世濟高僧都此草庵に住み大師自作の十二面觀音を安置し曾て庵中に八葉の白蓮現れたので蓮花院と號するのである。

第十八世快仙僧都は德川家の先祖源義重公の歸依を受け師檀の契を爲し、後に家康公三河から起つや當時の本院の住持雅法印は常に陣中にありて三軍の進退吉凶を知らしめる。元和二年秀忠公東照公の遺命に依り東照公肖像及び屏風二双を賜りたと云ふ、院内に東照公の靈廟がある。

尙當院は總本山の隣りに位する名刹にして交通の便よく宿坊の設備も整ひ六百人位は收容出來て、慰安等に就きても圍碁將棋等が備へてあり氣持よき寺院である。

關西財界の大人格者

寺田元之助氏

人格は人たるに於いての第一の要素なり、宛かも國家として、一國として、一市町村として人格を要するが如くである。人格なき人は人にして人に非ず。人格は猶天使のようである。君や親しむべく狎るゝべからずで誠に人格崇高の人にて期せずして自ら襟を正さゞるを得ない。肅然として敬を拂はざるを得ないのである。人として人格を造るの要義は修養と讀書力にある。讀書の力は平凡の人をして克く向上せしめる。而して向上の意義は人格と相通ずる故に讀書は知らず識らずのうちに其の人をして克く人格の人となさしめる。

君は當代稀に見る讀書子である其の知識の該博にて而して總合的である其人物の單調であつて而かも無數の趣味に富める其の人格の飽く迄偉大であつて而かも細心なる其の家庭の春風和氣にて而かも規律的である、皆之れ讀書的智能の煥發展化に外ならない。『英國人的氣質を以て米國人的の事業を遂行せよ』とは君の理想的である。君が執着力は英國人的氣質を表はし而して勇往邁進の資は即ち米國人的本能を表はす、苟くも天下に立つて事を爲さんと欲するものは英國人的氣質を以て米國人的の事業を爲すのに何をか苦しんで事の成らざるを憂うに足ろうや、君は能く時代を知るものと謂ふのである。君は又友誼に厚い、故に又人の窮に趣くの俠氣は其の揮身に溢れて往々自己を顧みない事がある。

『寺田氏の家庭』

人生至大の快は家庭の圓滿に依り得べきものなれども。悲しい哉。我國の紳士なる者は未だその眞味を知らず。彼等の家庭を見れば、妻女は空閨孤衾を擁して燈影豆の如き處に流連幾日尙歸らざる良人を待たざるべからず。破寵火氣既に絶え空櫃飢に迫るも貞婦の名を得んが爲めには、夜半袖を絞つて尙孤獨の生を送らなければならぬ、若し妻に忠なる良人あれば、社會はそれを賞揚するよりは寧ろ輕侮の眼を以てこれを視、新聞紙は冷笑の好材料として常に嘲罵を加へつゝあり、妻に甘いと云ふ事は寧ろ日本紳士の大恥辱の如くに考へて居る。

斯くして妻は愈々冷遇され、愈々虐待され、愈々戀行せられ、良人は益々遊情に耽る、紳士の家庭は斯くして腐敗しつゝあり、此の如き臭氣紛々たる紳士の間に我が寺田氏の家庭は實に純潔そのものである。氏は常に家庭に起臥する紳士である。極めて品性の高き人である。慈眼愛膓の人である、更に理想的の紳士である。

温かき、麗はしき。圓滿なる家庭のうちより。由來偉人傑士が現はる。家庭の王人たる婦人慈母が、ホームイントラクションに負ふ所の多きは勿論ではあるが、温かき。美しき、圓滿の家庭的原人は主人公たる男にある即ち男は之が家庭園の主人にして婦人、慈母は家庭園の帝王である前者は快樂と慰籍とを恒に其婦妻、愛子にも與え。後者は其大職の第一要務たるべきグットインランクションを兒女に施すのである。

是れ故に圓滿にして、麗はしく温かきホームには主人の篤行を要し品性を要し人格を要し慈母にも亦移山的の受情、崇高の淑貞操德を要するのである。

氏の家庭は極めて平和である。温良である。圓滿である。美麗である。宛かも春風梢を吹いて流鶯の止まるが如く、誠に靄々掬すべきである。氏は聲色を近づけず、端嚴自戒至らざるはない故に氏のホームには自然の高韻がある、丸るで天琴の喇亮を聞くやうである。平居卑野にして居常の放恣、醜陋、沒趣味なる者の家庭と比較すれば月鼈の相違がある。

家庭の醜惡なるは嚴格なる意味に於いて殺人的である、醜惡的である。斯の王山倒るゝ所、醜態百出し宛然百鬼夜行の惡芝居を常に演ずるやうなコンナ劣惡の家庭こそ此の殺人、醜惡の仕事をしつゝある者である。實に憐むべき悲しむべきものは家庭の眞味を知らない僞紳士共である。

人格の士

津田榮氏

人は強ち地位の高きと名譽の大なるを以て誇りとすることも又偉しといふことも出來ぬ、唯夫れ自己の踏むべき天職を完ふすると否とに依つて人物の貴目は左右せらるものである。

津田榮氏は岸和田市堺町の舊家津田家に生る。氏は慶應出身にて長らく山口銀行の名古屋支店

長、大阪南支店の重要の地位にあつたが山口銀行が三和銀行に合併に際して同行を辭し現在は寺田元之助氏の支配人である。吾人は常に人に接する毎に直覺的に來る印象としては對話者の精神作用が如何に働きつゝある哉の點である、會談久しきに亘つて倦むことを知らぬ人は必ず忍耐性と柔能く剛を制すと云ふ氣魂がある。津田氏は徹底徹尾主義一貫せる志操の人である、心意濶然たる士は兎に角繼續的忍耐性に缺ける處あるは人として先天的特性と稱する人もあるが、氏の如き虛心膽懷胸中何物をも秘めることなきが如き性來談白快濶の人にして其驚くべき忍耐性を持するに至つては世上多く見ることを得ざるの紳士であつて事に當つて必ず成功すべき素質を具備せられる偉人と云はねばならぬ。

亦氏が早くから津田文庫を個人で經營し之を開放して一般市民の智育の資に供し市民の精神文化向上の爲めに多大の犧牲と努力をいたされた、氏の偉なる人格の崇高の品性は知らず、識らずのうちに諸人を卒ゆるものがある。實に氏は岸和田ハ士中の一輪の名花である。

福助足袋株式會社

社長　辻本豐三郎氏

日本足袋王。福助足袋の社長辻本豐三郎氏とは如何なる人物なりやと余が遊說中に屢々質問をうけるのである、余は卽座に辻本氏は『至誠實行者』なりと應ふのである、而り確に辻本氏は至誠の人である、不言實行の人である。語るよりも手を用ひよとは氏が氏を躬を支配して居る。之れが氏の主義であり、理想である若くは良師である。父母である。

克く言ふ者未だ必ずしも克く行はずとは、氏が對人的要談の一となりてゐる。故に亦氏は口の人よりも多くの場合に於いて手の人を尙ぶ風がある。氏には全然表裏がない、暗黑がない、氏は極めて光明の大道を辿る人である。其口の人たらんより實行の人たるべきを主とせる氏は其仕事のうちにも絕えず一道の光明閃き、全幅の赤誠が盈ちてゐる。氏は常に語つて『至誠なれ』……『至誠は最後の勝利者である』と氏は晉に『至誠』を口にする計りでなく、其行にも『至誠』を主と

してゐる、福助足袋の製品に於いても『至誠の實行者』として氏の人格がハッキリ高めつゝある
ではないか。凡そ人物に尙ぶ所は其人格である、人格は人物の生命ではないが、而して其人格は
其人物附隨して、如何なる所にも見られるのである。假令へば其仕事に見られ、家庭に見られ、
態度應對に見られるのである。

若し之れを假に衒ふ者ありとするも、そは一時の事で幾何もなく、此如の人は馬脚を發露する
のである、僞善的人格の粉飾、宛かも鍍金のソレの如く幾日ならずして地金を露はすものである
人格は猶純金の如く啻に、錆、且變色の憂なきのみならず、其風趣自ずから欽すべきものがある
人格は猶金剛石の如く、氏は暗中にありて、尙燦然たる光輝を放つ、氏は決して衒はず誇らざる
も却て其天眞の流露なる處に靄然として掬すべきものあると共に、人をして轉た敬慕の念を禁ぜ
ざらしむるものがある。

更に亦人格が其仕事の上にも現はれるのは、殆んど不思議なほどである。福助足袋の過去及現
在を知る者は氏の人格をも知り至誠と確實と眞面目は同會社の金看板ではないか、其信用の世界
的偉大なる其名聲の海外に博せるなど要するに氏の人格が製品の上に迄感化を與へた結果に外な
らない。

資本の大なる會社は必ずしも其信用迄が偉大であると、一概にいへない、會社の信用は決して
資本の多寡厚薄によるもので社長其ものの人物如何に依るものである。

カネギーは『企業と資本』に就て資本金よりも、寧ろ其才能を企業に數へ、企業と人物との配
合宜しきを得るを以て成功的要素の一と斷案を下して居る、福助足袋は日本の足袋王として燦然
と輝くも全く社長辻本豊三郎氏の誠意と人格の賜ものである。

『福助足袋株式會社』

福助足袋工場が我國足袋製造界の覇王たるは今更云々を要せず、其鬱乎たる事業圏は業界の白
眉にして其の經營振りの周到綿密を極め從業員の優待に關する遺憾なき設備と寛容鄭重なる社員
優遇方法とは今や漸く首尾脈路完全し、宛然一大掌踵の如く起倒盛衰定まりなき事業界に於て、

駸々乎々一絲亂れず進展の武歩を示しつゝある。業績に至りては眞に稀觀の偉觀にして、徒らに巨資本を擁し膨大なる規模を有し、而も經營に困憊し左支右吾して僅かに事業の命脈を保持するに級々たるものに比し、全くその選を異にし、日本の足袋を語るものをして夙に代表的會社たる讃爾と崇敬とを拂はしるもの又宜なりと謂ふべし。而して今日あるは實に社長辻本豊三郎氏が一意一業主義を奉じ、全心力を其の事業に傾け苦心劃策向上發展の理想に邁進し、他に從業員諸氏亦協心戮力事業の興廢を以て一身の榮辱として努力を傾注し延いては勞働者の發奮を喚びたる結果に外ならぬ。而して其今日の成果は辻本氏以下使用人の末に到る迄の數千人が創立以來粒々辛苦の結晶たる亦能く世の知る處たり。

然らば關係者諸氏の決心覺悟は所謂彼の綱利實名の實業家と異り、眞に懸命を極め專心一意此の一事業に全心力を傾注し、粉骨碎身事業の發展經營設備の向上を念とし、一路此の道程を顧みず、從つて同工場營業成績が又他會社、他事業の容易に企及し得可からざる諸多の優点を有し駸々乎々として日に月に進展を重ね、六年越しの財界不況甚だしく事業界萎微不振を極め幾多の同業者は休業に操短に減資に四苦八苦を重ねつゝある時に於て、尚且つ能く効果を修め加之着々擴張の餘裕を示し、首尾一貫規模の充實に力め、製品の聲價益々高く、市場に於ける隆々たる信望を蒐め得るもの全く其の卓越せる經營の結果なりと謂ふ可く、終始一貫巨然として狂瀾の如き事業界の怒濤を歩當に疑惧の念を起さしめず。而して其の經營又消極に失せず徒らに操短や工賃値下の呼聲に惑はされず、整々堂々只過剩生産に陥るを避けつゝ、毫も業勢を微動せしめざりしもの其足跡は巨人のそれにして眞に王者の歩みと謂ふ可し。

福助足袋株式會社

取締役　小西熊次郎氏

其手腕、俊秀と人格の清明高朗の點に於いて稀れに見る工場長として株主は勿論多くの社員を初め數千の從業員の信望極めて深厚なるものがあるを見るは、これも氏が人格識見の一端を物語る處のものでなくてはならぬ。その民衆的の態度、その温容な風貌亦なんとなく人を魅する、即

ち徳を以て廉潔な性情を自然に發揮するやうに思はれる、敢て多辯を弄せず、一言一句悉く皆會社本位、實に花も實もある工場長と彼等は神の如く敬し慈母の如く慕ふつて居る。

氏は對内的には徳望を以て部下を統御の任を全うし、對外的には清明高朗なる人格と識見と力量を以て人を克服せしむ、兎に角温情主義にして敵も味方も求めない、只幸にして自已の徳望と誠意が對者に迎合するならばそれで可成といふ内剛外柔談快俠氣な性格は現代實業界稀れに見る床しい點である。

蓋しその生立ちその閲歴、その人格識見、手腕、力量、而も豊かな人間味を多分に持合す小西氏の如き取締役兼工場長を有する事は福助足袋株式會社の爲め洵に欣ばしいことである。

大思想を以て心を養へ英雄を信ずれば英雄となる。

（デスレリ）

泉南織物同業組合

副組長　西村元之助氏

國家の生産を助長するには産業組合の必要なる機關たることは爰に架説する迄もなく既に世人の認識する處なり、從つて近時全國各地に之が創設せらるもの百千も啻ならずと雖も多くは名あつて實なく之が原因の重なるものは首腦者に其人物を得ざるに基くのである。

由來産業組合は情實と慣習に纏綿せられ其統一頗る困難にして之が組合長たるもの專門的智能は勿論、聲望に相備はざるに於いては到底組合の機能を發揮すること能はざるべし。泉南の各種織物の發達は今や其産額に於いて優に關西に冠たる所以のものは固より、企業者の一致協力熱心奮闘の結果に外ならずと雖も又一面に於いて織物組合の指導奬勵の結果たらずんばあらず、換言せば泉南郡織物界の進歩發展は現副組合長（組長欠員）たる西村元之助氏の努力奮勵に負ふ處頗る多し。されば氏の如く大阪府重要物産として泉南織物の明星と多年盡瘁した功は今や刻一刻として實現なしつゝあるは獨り泉南の幸福のみならず實に非常時國防の爲めにも大いに慶賀すべきことである。資性は温和にして禮儀に篤く眞に紳士として申分のない典型的の副組合長である。

報德相互住宅株式會社

常務取締役　射場正謙氏

射場正謙氏は南紀切つての人格者である。氏は純眞にして高雅、廉潔にして謹嚴、眞摯にして着實、當代稀に見る好紳士と云ふべきである。氏は生れて一度も嘘を云ふたことがなく、人を傷けたこともない、だから非難を買つたり、人の指彈を受けた事がない、正路公道を直行すると云ふのが氏の性行である。かやうな性格の人は得てして偏狹に陷り易いが氏は此の限りにあらず、宏量で開放的である。人に對して決して上下貴賤の別を設けず應接される溫顏溫良人を春風駘蕩の感を湧き出せしむるも氏の人格のたまものである。

氏は亦南紀事業界の功勞者にして今や我が國の泉都の榮冠を戴く白濱、湯崎の開拓として白濱溫泉土地株式會社故社長小竹氏の片腕となつて惡戰苦鬪能く小竹氏を助け以て今の盛大に至らしめたる湯崎白濱開發の功勞者である。其他舊日高川水力、或は熊野自動車株式會社支配人として南紀の交通運輸上多大の犧牲を拂つた實に南紀交通界から逸すべからざる恩人である。現在に於ても全地方に新設される會社には氏が大抵關係を有し產婆役として敏腕を揮つて居る。

高島屋の重鎭

大谷友之進氏

泉州には人物が乏しい、否人物が澤山あるが吾人は現代の泉州人に大不平を有するものである其の理由は泉州人の型は少さい萬里の波上に鯨の浮ぶ如き態度あるものはなし、何れも藝妓買ひの空威張と鑛金細工の俗臭粉々不謹愼極まるものが多い。此秋吾泉州出身にて、本邦デパート界に慧星のソレの如く實に電擊的の一異彩を放ちつゝある高島屋營業部長大谷友之進氏は泉南郡雄信達村馬場の產れである。吾人は斯る俊傑を得た事は眞に泉州の精華であり、龜鑑であり、又我等泉州人の大なる誇りである。

高島屋百貨店は大大阪の商工業を代表し、本邦百貨店界に君臨し、大衆的デパートとして白熱的の大歡迎をうけつゝ有る。高島屋百貨店本店營業部長であり、南海高島屋の支配人として快腕を振ひ、寧ろ大谷君の腕に凄味がありと同業者間に驚嘆せしめてゐるのは我大谷友之進氏である

大谷君は大膽にして而も細心、聰明にして而も沈毅、穎達にして而も廣量、先見の明、着眼の鋭敏迄大事を遂行すると言ふ勇氣と苦節を備へて苟くも一度劃策したる事は、中途にしてドンナ障害があつても敢行せねば熄まぬといふ、いとも賴母しき活き〳〵した精神をその渾身に漲らしつゝあるは大谷氏である。而し大谷氏の百貨店經營の定義を聞くところに依ると、百貨店なる商賣は絶對に顧客に對して首を下げねばならぬ、而して顧客の爲めに多大の犧牲を供するを辭しては此の商賣の成りたつ樣なし。若し高島屋が幸にして利益を受くる事多きに至らばそれ丈けは顧客の便利を圖る設備のために費さんとは氏の信條であると聞く。現在大阪には澤山百貨店あるが眞に大衆的の百貨店は極めて僅少である。

南海高島屋は實に徹底したる大衆的デパートとして好評赫々たり。大谷氏は嘗て歐米を視察したる新智識を即應用したのである。高島屋百貨店は大阪とは云はず實に我國のデパート界に君臨し、大衆的の大デパートとして白熱的の大歡迎をうけつゝある、何故に高島屋は斯の如く大衆から好評を亨けるのかと云へば、それは例の高島屋獨創的の拾錢均一賣場の設置にあるのである。

亦小賣商人がデパートに一大脅威を感ずるのも實は拾錢均一の投賣的のものに存するのである。

高島屋は斯の如く多大の犧牲を拂つて此の快擧を敢てなし遂げたので、他のデパートも高島屋に對抗して拾錢的一賣場なるものを設置するやうになつたのである。此の大衆に否顧客に萬足を與へ、高島屋は我等の高島屋なり、高島屋は實に物が安い品が良くて値段の廉い買好き店なりと大好評のもとに、日に月にグン〳〵と旭日東天の勢ひで他の百貨店を壓倒して行くのは取りも直さず、立案實行者である營業部長大谷友之進氏の商才と先見の明の賜ものである。更に大谷氏は大大阪全市に亘り、高島屋チエーン、ストアーを開始した。斯くして高島屋は全市に商網を張ることは獨り高島屋は利益を得るのみならず、實に吾等大衆の生活權保護者として禮讃されて行くのである。今後の高島屋は實に熱の人、努力の人、膽の人、新智識の人、大谷氏に俟つところが多い好漢大谷氏よ、我等泉州人は氏の健闘を心から祈つて止まぬのである。

新興毛織株式會社

常任監査役　廣澤耕作氏

自大思想、自己の尊大の時代の趨も知らねば他人の進歩も知らず、世の中は何時も自分計りが勝者であるやうに思ひ、富の單位も變れば人物の相場もかはり、世は既に遺忘せんとしつゝある に依然として富の所有者、名望の抱擁者と自認し、泰然自若たる人の多い我が毛織物界に唯一人群鷄の一鶴、退嬰、落伍者、亡び行く忘想家を卑視し、業界の天下を支配する底の一大氣魄を有する快漢新興毛織株式會社常任監査役廣澤耕作氏を有することは業界の誇りであつて、亦一服の清涼劑である。否カンブルの注射乃至食塩注射である。

廣澤氏は岸和田の産にして現在新興毛織物株式會社の常任監査役である。名は常任監査であるが事實は河崎助太郎氏の代行として專務以外の實力を有し會社の一切の業務を統て居る。

氏は實に大事業會社の首腦として適材適所である。事務上にも社交上にも傑出せる手腕があり廉直恬淡而も何物の誘惑にも打勝つ堅實無比鐵石の如き意志の持主である。豪膽にして且つ用意周到、大膽にして而して細心、流石に舊岸和田藩の名家の出だけあつて士魂商才を兼ねた全幅に横溢せる毛織物界の一異彩である。

河崎助太郎氏は烱眼は能く廣澤氏を見い出し一切の權限を擧げて氏に委ねて居る。斯くして氏の就任後は同社は著しく内容は充實刷新し全く面目は一新され日進月歩業界の王者として斯界をリードして居る。

『廣澤氏の人格』

氏は人と接して駄辯を弄せず、但し談論興に入れば快辯を揮ふも無益の言は一言半句も弄せず一言一句必ず責任を持つ所謂言語の價値を重ずる人であるに敏なことゝ遙かに儔輩を拔けり、氏は辯舌に於て多く語らざるも、其社交に於ては流石に本場仕込だけあつて貴公然たる風采と玲瓏玉の如き品性を以て人に接す。猶氏は春秋に富めり、加ふるに明晰なる頭腦を持てり、前途囑望すべきものあるは吾人は茲に贅言するを要せず。

熊野自動車株式會社

營業課長　楠本貞一氏

君は視るからにキビ〳〵した現代的の透明せる頭腦に依つて總べての事物を判斷して行くと云ふ快濶なる壯年紳士である。吾人は曾つて君を熊野自動車本社に訪問して會談數刻に亘つたことがあるが、多く現代式新進の教育を受けた人は理性の一方にのみ偏して感情の或る一面を忘却する人が多いやうであるが我が楠本君に至つては實に其の両面の完備した現代に於いて求めて得難き典型的紳士である。

君は曾つて西牟婁郡書記を經て熊野自動車株式會社に入り營業課長の要職に就き、以來一意專心、奮闘努力、熊野自動車會社の爲めに盡せり、吾人は君の縱横の才腕よりも其の摯實なる感情の人たるを衷心渴仰するものである。

岸和田煉瓦綿業株式會社

社長　金納源十郎氏

人は退いて身を修め家を齊へ、一點の疵瑕なききとは、實に國の良民たるに愧ぢぬ、けれども猶更らに進んで公利を圖り世務を開くにあらざる以上は、未だ以て國家に對する義務を盡せりと云ふことは出來ぬ。家にあつて獨りを愼むは固より修身の始めであるが、併し一身の修得は廣く公衆に關する利益の大なるには及ばず、又進んで公衆の爲めに有益なる事業を爲すは、獨り退きて智識を研くより遙に切要なるものにて、如何に鋭利なる思慮も未だ敏捷なる行爲の價値多きには及ばない、實に人生に於て最も高尚なる希望は事業を經營して社會進歩の一分子を加ふるにある。然るに我國の封建思想は徒らに知足を戒め、僅かに資産を有し漸く生活を支ふるに至れば最早、無爲にして化する弊風がある。

蓋し地方の門閥と稱するもの今尙此の弊風を脫せず、資産もあり、信用もあり、相當の才識か

有するものにして依然として高等遊民として得々たるものが甚だ多い。之實に國運の進展を遲緩ならしむる一大原因と云はねばならぬ。此時に當り地方稀有の門閥家を以て喧稱せられつゝある金納家の當主源十郎氏が夙に時勢の趣向を看取し岸和田市の產業發展の爲め一意專心努力せられる如きは又以て意を强ふするに足るべきである。

金納源十郎氏は岸和田市北町に生る、金納家は代々酒造業にして岸和田の金源と云へば關西釀造界に於ても押しも押されもせぬ家格と信用を得てゐたが當主源十郎氏の代に至つて酒造業を廢業し專ら大會社の重役として泉州工業界に滿身の力をいたして居る。

氏は實業振興のみに腐心し政治的方面には何等の野心なく自ら陣頭に起つて中原に鹿を爭ふやうなことをせず多くは出入のものか或は乾分を出馬當選せしめて常に大所高所から彼等政治家を監督し且つ面倒を見るといふた風ふの紳士である。唯氏の公職としては岸和田市教育會長位のものである。物質文明の餘弊として精神文明が遲々として進まず、市民の精神生的向上發展せしむるにはどうしても市教育會を强大擴張せしめ市民大學たらしむには會長其人を待なければならぬ

金納氏は富あり人格、識見、力量手腕がありて市民より絶大なる信認と尊敬されて居る人であるから市教育會長として眞に得難き適任者である。

氏は性温順にして毫も虛名を思はず、質素儉約、人に接して謙遜を重んじ門閥を鼻にかけて財產を誇る等のことは更にない。

和歌山市長　渡邊行太郎氏

政治家の目的の狹き意味に云へば立法府の議員なれども、廣き意味にて云ふときは、國を善くすることは總て政治家の任務である。然るに我國人動もすれば謬見誤想に驅られ、府縣會議員代議士たるにあらざれば政治家として國家を經綸する能はざる如くに思推し甚だしきに至りては、抱負なく才能なく、虛榮の爲に政治家に列せんとするものが甚だ多い。然れ共國家の根底は自治體である。されば自治體にして健全に發達すれば國家は期せずして興隆すべく、されば經世濟民の事業と云ふは、必ずしも代議士となり、或は大臣たらずとするも一町村の首腦たりとも誠に自治制の長所を發揮することに努めたらんには直に以て世の模範となり、滔々たる供水大潮の如き頽風汚俗を山中の一部落によりて堤防し、其の感化に依りて日本帝國の元氣を維持することが出來る。果して然らんには此の人の功は大臣にも讓らずと云ふべきである。然るに近時政治家の風潮を見るに徒らに空理空論に流れ退いて實行を圖んとするものなく、唯日已一身一家の榮譽のみ

に腐心するものが多い、此の時に當りて市會絶對多數と十二萬市民の諸氏の絶對的信任を受けてゐる和歌山市長渡邊行太郎氏は舊和歌山藩故渡邊邦藏氏の三男明治十四年三月十二日に生れ、明治二十八年七月十一日東京帝國大學工科大學造船科卒業同年七月十七日遞信省海事局技手任にぜられ東京海事局在勤を命ぜらる、爾後船舶檢査事務に從事、同三十九年八月六日航路標識管理所技手兼海事局技手に任ぜられ、横濱海務署在勤を命ぜらる。同四十年七月十六日海事局技師に任じ大阪海事局在勤を命ぜらる、同十月二十五日帝國鐵道廳技師に任ぜられ帝國鐵道廳運輸部船舶課勤務を命ぜらる爾後船舶運輸及新造修理工事監督に從事す。

大正二年五月十二日神戸鐵道管理局運輸課船舶係長を命ぜられ、同局所管關釜、山陰、關門、中國諸連絡航路の事務を管理す。同三年七月九日遞信省技師に任じ遞信省管船局船舶課勤務東部遞信局兼務を命ぜらる。同年八月十八日青島事變に際し碇泊場司令部付を命ぜられ、陸軍御用船檢査事務を執る。同五年三月三十一日願ひに依り本官を免ぜらる、同日帝國海軍協會總裁より同會主事及檢査員を囑託さらる、同六年七月以後笠戸造船所創立事務に從事し、同年十二月以後山

口縣下松町に設立せる笠戸造船所庶務課長に就職の處大正七年七月同所事業中止に付き辭職す。同七年十月より同九年一月まで株式會社大島製綱所營業課長就職。同九年九月以後浦賀船渠株式會社囑託となり引續き同社總務課兼調査課長となり。次で目下專務取締役に就職。同十一年十月二十日より日本鑛釘株式會社專務取締役を兼ね目下同社長を兼ぬ。昭和五年十二月より現在和歌山綿布株式會社取締役となる。以上渡邊氏の略歴である。

氏は斯の如き財界に常に活動せられその經濟的手腕の豐なることが窺はれる。今後の都市の經營は行政的手腕は勿論必要であるが、眞に都市の發展は經濟的に豊でなければならぬ。殊に和歌山市の如き商工都市否勞働都市の市長には何うしても行政的手腕よりも經濟的手腕の豊であり、而も今後の都市の經營、都市の發展は勞働政策を沒却してはその都市は發展しない。卽ち市民の多數を占む無産大衆の眞に住み心地よき和歌山市を經營爲すには、この勞働問題に理解を有する渡邊行太郎氏市長たることは眞に和歌山十五萬市民各位の一大幸福である。

氏は關東實業界に於ても勞働問題には造詣も深く、特に勞働者には理解あり、同情を有する資本家として勞働者側より我等の父よと尊敬せられた所謂人情味豊なる人である。

春木町長

藤原右門氏

凡そ國運の隆盛と民生の幸福とは地方自治體に發達進歩に俟つ所甚大なるものがある。卽ち地方自治體は國家の基礎なると共に、又國民生存の根據となるものであるから、其の經營は最も意を用ふべき所である。而して之が發達を圖らんとするには、之を指導すべき首腦者に其人を得なければならぬ。然るに自治體の首腦者が一般に向下しつゝある傾向があるのは國家の爲めに甚だ憂ふべき現象ではないか。

斯の如き場合に當つて偶々吾春木町が德望を以て地方に普きたる原藤右衛門氏が町長たることは町民の爲めに甚が賀すべきことである。氏は泉南の名家春木の原家に生る、家富裕なり、故に世の風波を知らず安樂の内に人と爲りしと雖も、資性聰明、克く事理を辨じ滔々たる富家の兒が常に我意を振振ひ、學事を好まず遊逸を事とし、長じて無爲の鈍物となるとは大に其趣を異にす

る處ありき、學齢に達して小學校に入る、せんだんはふたばより香し、理解敏くして亦强記に常に他を凌駕して首席を占めたり、小學校卒業後直に大阪府立農學校に移り、茲に園藝學を研究し熱心、精勤規定の學科を修了し優等を以て卒業す。

偶々白井治平氏等は石井定七氏と同他に東洋帆布株式會社を起すや、白井氏の代理の資格にて支配人として入社し、以來堅實なる意思と勇敢なる精神は鞠躬孜々として經營慘澹社運の隆盛に心血を注ぎしが先實の明ある氏は石井社長の不誠意を看破するや重役の懇請を拒絶し斷然退社し大正十一年北掃守村信用組合を越し自から其の主管となり村民に多大の利便と利益を與へ更に數年前原甚之丞等と相謀り府中織物株式會社を創立し原甚之丞を社長に氏は專務取締役となり次いて春木町長に選ばれ町政の爲めに盡瘁したるが一度辭職し本年再選せられ孜々として骨身を措まず、一生懸命意氣軒昂にて町政を處理爲しつゝあるなり嗚呼氏の如き餘裕ある。豪家に生れながら其富資に依賴せず自ら勵み自努めて公共に熱中するは實に富豪子弟の好模範となすべきなり。

人格の士

岸田良太郎氏

基礎の鞏固と信用の宏大を以て泉州銀行界に君臨する宇野亮一氏を頭取とする岸和田銀行である、而して同行に缺く可からざる有用の器材たりしものは我が岸田良太郎氏である。

器材は心的生物である、其進展向上は其の本性である、此點於いて一般の要素を岸田氏の爲め望むものである。氏は良と珍とするに足る君子人なり卽ち意の誼るべからざる所の斐たるにある君子人である。宇野頭取の一切の代理を務むるものは氏なり、而かも克く此の重荷を意とせず却つて全渾の智囊を盡くして之れが重職を辱めざりし氏は確かに銀行界の偉人である。士は己を知る者の爲めに死するを以て却つて屑とする氏の如きは確かに丈夫である、亦氏は泉州銀行界の順要の人物にして岸和田銀行は勿論宇野財閥の離すべからざる逸材である。

東洋製綱株式會社

常務取締役　川崎久勝氏

當今日本の製綱界で先づ手腕家なる者を求むる場合には名望隆々たる社長級に於いてするよりも寧ろ常務、專務、支配人級の人々にあつて其多くを得らるものである。

社長級の人々等は所謂名望で立つて居る人で、經濟上の勢力と社交上の信任とこの二點を以て兎も角も一社もしくは數社の管理者として常務、專務、支配人の人々を操縱して居るのである、けれども其れが決して能くやり切ると云ふ手腕の力でなくて、其勢力の過半以上は、彼等に追隨し、若しくは彼の下にあつて業務を擔任せる專務、常務の人々の術中に因る者である。だから單に製綱界の手腕家と云ふ場合になると最も多く實務に當つて居る常務、專務の側に於いて求めねばならぬ事になる。

常務、專務、支配人に級に於いて巾を利して居るものは川崎氏等を擧げねばなるまい、氏は實際素養もあり、資力もありして隱然重きをなして居る、氏の製綱界の其潛勢力は大したもので老成な社長株は差し措いて實際の勢力と云ふつたら實に大なる者である。

かくして氏は日本の製綱界の勢力圏を三分して完全に其一を保つ巨頭である。川崎氏の力量と手腕を信じて居る中村社長は一切川崎氏に任せてゐる一切の權限を悉任され氏は中村社長の意氣に感じて居る。人生意氣を尙ふ男子亦知己に感ず、社長は自分を買つてくれたといふことは大なる知己である、此の知己に對して酬ゆる所以の道は精力の傾倒にある、粉骨碎身にある、滿腔の誠意を捧げて社務に當るにある。

氏は益々愈々知己の感を深めて行く、纖し身を千々に碎くも、辭するところでない。オ……起つ、ヤツケル東洋製綱をして日本の製綱たらしめる、今に見て居れと興奮的川崎氏獨特の負けず魂しの彈力は一層の猛火となつて氏を發奮せしめた、氏は滿身の精力を傾けて社務の刷新を謀ると同時に他面に於いては全渾の智力を振起して幾多の情弊を剪除した、之れより社務整理の緒に就き他面販路の擴張に腐心の結果今や海軍指定工場として旭日東天の勢いで製綱界の覇王とし

て歡稱の辭は充ちて居る氏は意氣の人である、渾身總て之れ意氣を以て成れる人である。故に氏は如何なる場合に於ても亦如何なる人に接するも、氏は何處までもエキスプレションなり而して氏のエキスプレシは物を呑み、人を呑み、時には事業迄も呑んで掛るなり、豪膽・氏の勇氣、而して氏の事業に對する執着力は全く此エキスプレションの權化したものにあらずして何ぞや、氏のエナヂーは此意氣の發動し來れる結果にして而して氏の意氣は理性と調合し、自信力と配合す氏は此最も鋭敏なる原動力によつて先づ其發揮點を得たるものにして斯くて氏は更らに強烈なる執着力精力主義を以て終始する人である。

氏は既に執着力に富めり、縱令如何なる難問題に際會するもドコ迄も其進行を續くなるなり、蓋し東洋製綱は氏の生命なるが如く同時氏一身が東洋製綱の生命となりて終始すべきなり、氏の前途に綿上更に花を添ふ光々として輝やいてゐる。

和歌山市實業界

巨星　阪田彌兵衛氏

自己主義を以て世に處せんとする時代は既に過去のことである今日の實業家は須らく世界的なると同時に自己主義を改めなければならぬ。然るに余輩が今日まで見聞したる所によれば和歌山縣人は餘り自己主義ならざるなきか、されば自己の利益を計らん爲めには殆ど何物をも顧みるの暇なきが如く、眼中國家なく、社會なく、隨て他人の榮達を見れば甚しく之を妬むと共に自利の爲めには他人の迷惑をも構はず、國家公益をも尙犧牲にして顧みず、總て利害問題にあらざれば人と結合の出來ないと云ふ傾きがある。併し一個の素町人として社會の階級より遠ざけられたる野蠻時代いざ知らず、今日の文明的實業家として社會に最も勢力ある紳士として待遇せられ、且つ自重せざるべからざるに抱はらず、自ら素町人根性に甘んじ、舊思想を脱し能はざるは余輩が和歌山縣人一部の人々の爲めに痛嘆に堪へざる所である。此時に當りて和歌山市の財界の巨擘と

して人格的の紳士紳商を物色すれば先づ指を阪田彌兵衛氏に屈しなければならぬ。

阪田氏は和歌山市の代表的綿糸商にて資本の巨大と經營振りも總てが合理的である點と店員も店主も差別のないといふ温情の溢るばかりの店は和歌山市内に阪田商店あるのみと云ふても過言でもあるまい。地方の信用は勿論であるが大阪市場に於いても信用は殊の外厚く、阪田商店なら大丈夫だ……と確い店で押しも押されぬ一流商店である。

資性温厚篤實にして風采悠度の應揚なる然かも自然に具はる品性、品格を有し一度氏が温容に接せんか、駘蕩として春風に吹かゝる想ひあり。

氏は決して野心がない、有り餘る資産を有してゐるのであるから眞に氏にして野心があり、名譽慾に汲々たるものあればどんな事でもなし遂げられないことはない。けれども氏には夫れが毫もない飽迄無官帝王を以て任じ、縣下は勿論關西財界の隱れたる勢力として終始して居る、輕薄なる當世に多く見るべからざるの實に奥床しい好紳士である。

衆議院議員

山口義一氏

政治家に缺くべからざるものは雄辯である。恰も戰場に於て武器は兵士の生命なるが如く、雄辯は政治家にとつて唯一の武器である。縱へ識見が高く抱負があり、主義主張ありとするも、此武器を有せずんば到底政治家として成功する譯には行かぬ、況んや主義もなく主張もなきものに於いてをや、然るに世には雄辯家少なく又主義の堅備にして且つ偉大なる抱負を有するものなく是れ政治家として成功するもの丶甚だ寥々たる所以である今大阪府下に於いて政治家に志せるものを見るに又此例に漏れず、試みに憲政布かれて以來代議士幾十人、國家經論の天才を抱き議政壇上に侃諤の辯を弄したるもの果して幾人がある、多くは陣笠となつて甘んじ、其存在をすら認められたるも少なし、又心細きことならずや、之れ蓋し悉く政治家として識見抱負を有せざりし結果にはあらざるべく其唯一の武器たる辯論に長ぜざりしの致す處であらう。

我山口義一氏こそ萬人敬慕して止まざる天下の雄辯家にして議員の花である。山口氏は堺市の名望家山口家に生る、大正四年東京帝國大學出身の法學士にして其專攻は社會政策である。代議士に當選すること四回にして曾ては田中大將内閣時代に大藏參與官として巾を利かし亦昨年迄は大政友會名幹事長として黨の重責にあり能く三百の代議士を統制したる名幹事長であつた。

氏は貴族院改革はその持論であり、大正十一年の議會に建議案を提出し長袖議員を驚かしたり曾つて普選運動の際純正普選派なる普通選擧反對の一團が全國普選聯盟に挑戰して立會演說を申入れたときその演說會は血を流さなければ止まないだらうと見られ、普選を主張する議員の生還は難しいと傳へられ、會場に宛てられた國技館には殺氣が溢れてゐたが、兇猛なる反對派の壯士の中を悠々として通過し、單身奥の一室に控ゆる敵將に挨拶をした不敵の行動、從容として迫らざる態度は普選のために萬丈の氣を吐いたものである『彼れは偉い男だ』と敵將内田良平氏をして感嘆せしめたことがある。

當時余は西日本に二十一萬五千の會員を有する西日本普選聯盟の幹事長として常に山口氏と往來し親しき間柄であるから氏の人物を能く知つて居る。氏の位い正論を主張して屈せず普選問題には完全なる普選斷行を高潮し純眞なる主張堂々たる言論は實に立法府の權威となつた、現在政友會所囑三百の議員の中、氏の右に出づる議員は果して幾人あるか、近き將來には必ず大臣として國政を料理する時代遠くあるまい。

昭和九年六月二十五日印刷
昭和九年六月三十日發行

（非賣品）

大阪府岸和田市筋海町十四番地
著作者　原　靜　村

大阪府岸和田市筋海町十四番地
發行兼印刷人　原　德　太　郎

大阪府岸和田市筋海町十四番地
印刷所　南　海　新　聞　社

不許
復製

發行所　大阪府岸和田市筋海町十四番地　南　海　新　聞　社

終